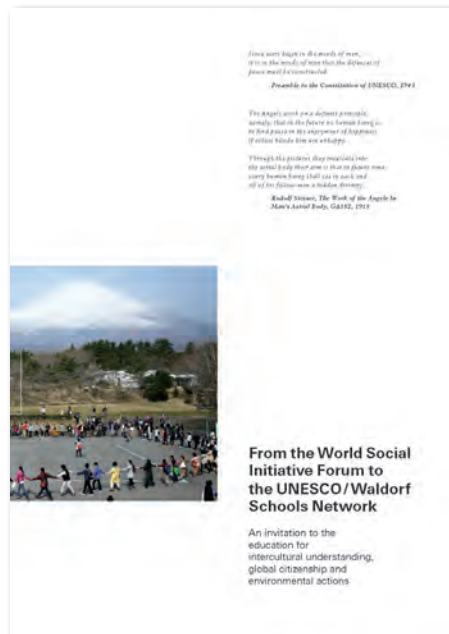


シュタイナー系の
ユネスコス쿨の
世界的ネットワークが
立ち上がりました。
2018 年(日本開催)と
2019 年(エジプト開催)の
"社会イニシアティブ"
世界フォーラムから
生まれた
イニシアティブです。

2019年12月の
"社会イニシアティブ、
世界フォーラム
(エジプト)で
配布した英文冊子



ブクリールあんな通信さ91

2020 年1 月発行



発行 CR・チルドレンズ・リソース・インターナショナル
代表 川原 翼
編集 安藤 将・青山 啓香・小貫 大輔・西原 里依・橋口 博幸・星久美子
住所 259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1 東海大学国際学科気付
Fax 0463-50-2407 東海大学国際学科小貫大輔研究室
E-mail criinfo@cribrasil.org
CRI - Children's Resources International (子どもたちのための国際的資源)
「ブクリール」はポルトガル語と「子ども」スペイン語で「子育て」の意。

表紙

【"社会イニシアティブ"世界フォーラムとユネスコス쿨】関連記事

- p.2 エジプトで決まったこと 小貫 大輔
- p.4 エジプトで文化間相互理解を実感する 安藤 まっさ
- p.6 UNESCOユースセミナー2019 星 久美子

【"彩とりどりの子どもたち"】関連記事

- p.10 "彩とりどりの子どもたち" 活動報告 川原 翼
- p.15 彩とりどりの花園を夢見て
—多文化社会に向けての小さな一歩 in Hadano— 三田村 晴美
- p.22 日本語教育推進法に関する国際フォーラム in かながわ 川原 翼

【モンチアズール 40 周年記念祭】関連記事

- p.24 なぜモンチアズールにいとこんなに楽しいんだろう? 安藤 まっさ
- p.28 七年ぶりのブラジル ~モンチアズール~ 渡辺 恵美

【ボランティア体験記】関連記事

- p.32 丹羽 広大
- p.34 河村 響
- p.36 板垣 ひとみ
- p.37 佐藤 愛
- p.38 モンチアズール母娘珍道中 後半 阿部 すみれ
- p.58 追悼 アラウージョさん 小貫 大輔

裏表紙 CRI 会員募集・活動紹介

『社会イニシアティブ』世界フォーラム in Egypt 2019

エジプトで決まったこと 小貫大輔

二〇一八年の三月から四月にかけて身延山と御殿場で開催した『社会イニシアティブ』世界フォーラム、その今年の集まりがエジプトで開かれました。期間は十二月十二日から十五日で、カイロにあるSEKEMというシュタイナー系の企業・農園・コミュニティの団体がホストとなりました。日本からは私と京田辺シュタイナー学校の吉田敦彦さん、北海道ひびきの村の関倫孝さんと関麻依子さん、北海道の農業系企業家の伊藤英信さん、それに北海道いずみの学校の卒業生の河村響さん、丹羽広大さんが参加し、スイスから安藤将さんも参加しました。

CRIからは、一昨年のフォーラムに関する英語のレポートを持っていき、参加者に配りました。一昨年のフォーラムは本当に心温まるフォーラムだったので、リピーターの参加者の中には涙を流さんばかりに喜んでくれた人もいます。

日本のフォーラムには、たくさん的高校生が参

加していましたが、彼らの中には神奈川や北海道のシュタイナー学校の生徒たちや、関東圏のユネスコスクールの生徒が多く混じっていました。それらの学校の先生たちもたくさん参加してくれました。東海大学とCRIの共同で、普段からそれらの学校を集めてUNESCOユースセミナー（*）という若者の合宿セミナーをやっているからことです。

*一昨年の春の世界フォーラムの後に、すでに二回、このUNESCOユースセミナーを開催しました。今年の会には、ゲーテアヌム（スイスにあるシュタイナー思想の本部）から、その理事を務めるジョン・スリーさんと、長く理事を務めていたパウル・マッカイさんもチラシと顔を出してくれて、ジョンさんは南アフリカのシュタイナー学校について講演もしてくれました。

一昨年の御殿場のフォーラムあたりから話しあっていたことですが、そろそろ世界各地のシュタイナー学校でUNESCOの呼びかけに応じる学

校の国際的なネットワークを作ってはどうかというのを、今年のエジプトのフォーラムでは真剣に話し合いました。

UNESCOは以下の三つのテーマを学校で教えてほしいと呼びかけていて、それらの教育に取り組む学校を「ユネスコスクール」と認定しているのです。

- 1 地球市民教育と平和と非暴力の文化について
- 2 持続可能な開発と持続可能なライフスタイルについて
- 3 文化間学習と文化的多様性と遺産の価値について

話ほとんどん拍子に盛り上がって、とうとう今年のエジプト・フォーラムではSEKEMの学校（エ



エジプトの「フォーラム」で若者たちに語りかけるウテさん（中央）とトゥールスさん（左）

SEKEMコミュニティ企業とは

人智学を基本思想としてエジプト・カイロ市郊外の砂漠の中にコミュニティを作り、その生産物を商品として医薬品や食品を生産し企業活動をしている団体。7年前に大学も創設し、コミュニティ人口1,200人、学生数1,300人を抱える大きな団体です。

ジプト）、ハッピースクール・イニシアティブ（ベトナム、Chengdu（成都市）のシュタイナー学校（中国、モンチアズール（ブラジル）、京田辺と横浜のシュタイナー学校、それにゲーテアヌム（スイス）の署名で、世界各地に散らばる三十ほどのシュタイナー系ユネスコスクールにネットワーク創設の呼び掛け文を送ることになりました。

おっと、言い忘れましたが、エジプトにはブラジルからウテさんとネルソンさんがやってきていて、とても意味のある深い時間をともにすることができました。しかも、この世界フォーラムをウテさんと一緒に立ち上げたオランダのトゥールス・ヘレーツさんも参加していたので、オースターののような集まりとなりました。トゥールスさんはウテさんより七歳も年上で、八九歳。でも、二人とも七〇歳といってもまったく問題なく通る若々しさです。

今年、シュタイナー教育は百年の誕生日を迎えるのですが、UNESCOとの共同が実現すれば、新しい百年間のプロジェクトになるのでは、と期待は膨らみます。百年後の世界は見れないにしても、その半分ぐらいまでは責任をもって次世代に引き継いでいかないといけない。ウテさんとトゥールスさんを見ていてつくづく思いました。

文化間相互理解を実感する

——イスラム社会とは？ 中国人とは？
出会った人たちは皆似た心を持った人たちだった——

安藤 まつさ

今回のフォーラムの副題は「西洋社会が出会う地元のイスラム社会」でした。エジプトはイスラムの国々の中ではそれほど戒律に厳しくないように、たくさんさんの地元の女性市民活動家たちも参加していました。彼女たちと会話できたことは大きな収穫でした。私たちが普段イスラム教の国々を歩くと、ほぼ女性と会話することは不可能です。それ故、彼女たちがどのような意見を持っているのかということに大きな関心がありました。しかし今回のフォーラムでは、女性参加者たちは活発に発言し、素晴らしい意見と行動力を持っていることがわかりました。彼女たちの話を聞いていると「もしかして女性が聡明ゆえ、一部のイスラム社会は（日本社会も含めて）女性の社会進出を阻んでいるのではないか？」と勘ぐるほどです。

SEKEM コミュニティー内は特別空間であるということとは伝えておくべきでしょう。私たちが一瞬間間見たエジプトのカイロ市内の様子とはかなり異なり、そのコミュニティ空間だけは「西

側社会」であるという感慨は否めません。車窓やマーケットで見るカイロの市内は砂漠と同じ薄茶色の街まちが広がり、沢山の放置されたような建築途中の埃色のビルの乱立が目立ちます。私がフォーラムで出会ったエジプト女性たちはイスラムスタイルの服装はしているものの、英語を活発に話し、どう見ても市内を歩く女性とは様相が違います。

それぞれの地域には自然環境とその土地に強く結びついたルールがあります。それ故私たちが正しいと思う現代西洋社会のルールをその地域に当てはめることは非常に危険です。しかし、それでも個人個人の心が解放されてお互いが理解できる多様性社会を創っていくことに大きな期待を感じます。今回エジプト人女性と話ができたことは、確かに地域固有のルールはあるにしても、人間個人の精神はやはり同根であり、お互い理解を深めることは可能であると思いました。

今回は小貫大輔さんと吉田敦彦さんの提言でユ



カイロ市内で生きた羊を売るベドウィン



砂漠に突然現れる SEKEM のヤシの木の植林農場



カイロ郊外の砂漠



アラブの挨拶のワーク



ウテさんのワーク



世界各国の教育関係者が膝を詰めて



フォーラム創始者ウテ・トゥールス若者と語る



UNESCOユースセミナー 2019

星 久美子

2019年7月20～21日 東海大学湘南キャンパス

参加者数：113人 / 参加学校・グループ：14校

五回目を迎えたUNESCOユースセミナー。百人のティーンが集まるとどんなことが起きるのか、少しご紹介します。

いつも通りの 順調に楽しいセミナー

ティーンのエネルギースはすごい。「楽しい」と感じることに向かう力は真つすぐで嘘がない。全身で、全霊で熱中する。誰が見ていようが、どれだけ時間が過ぎようが、力のある限り続きます。

今回のセミナーには過去最高人数の参加がありました。なんと百人超え！ブラジルのカンピーナスというところから日系団体の若者グループが来日中で、二十人のブラジル人ユースが参加してくれることになったからです。

セミナー開催も五回目となると、企画しているわたしも慣れ、進行中も「うん、いつも通りいい感じね」と余裕ができて、いくらかリラックスできます。ちよつと刺激が足りないかなあなんて思ってしまうくらいです。二日間のプログラムを考えると、いつも参加者同士の「出合い」を大切にしています。はじめましての人間たちが、しかも言語と文化の異なる人間たちがどうやって友達ちになれるか、そのために必要なアクティ

ビティを相違工夫してつくってきました。それが上手く機能して、参加者たちにウケると、わたしの仕事は終わったも同然。「ひひひ。計算通り。どや！」とニヤニヤするわけです。

しかし、今回のセミナーは、少しちがう、ニヤニヤよりもビックリの方が強く残る回になりました。

朝っぱらから 「夢見る少女じゃいられない」

セミナー二日目。みんな眠そうにぼーっとしながら、集まってきます。朝食はケバブ・ロール。「寝てない」「朝からこんなに食べれない」とか言いながら、ちよつと不機嫌な子も、徹夜明けの変にテンションの高い子もいて、ちよつと面白い空気が生まれます（これも、毎年恒例）。このあとは、グループで集まってディスカッションをすることになっていたのですが、急にカンピーナスの子たちが「祭りダンスをしたい」と言ってきました

た。「ん？まつり？ダンス？」カンピーナスで、

いやブラジル全土で流行っている日本っぽいダンスだそうで、とにかくぜったい盛り上がるからやりたい、とのリクエスト。それじゃあ、目を覚ますためにもラジオ体操的な運動を取り入れるのもいいかもね、と音源をもらって、みんなに集まるよう呼びかけました。わたしは内心、「スベつたらやだな……」「長引いて次のアクティビティの時間が足りなくなったら困るな……」という心境でした。

カンピーナスの子たちは慣れた感じで教室の中央で輪になり、「私たちの動きをマネたらいいから」と自信満々にスタンバイ。何も分らない人たち（私を含め）はその輪の外側に配置され、「え、なにが始まるの？」と隣り同士で不安そうに顔を見合いました。

前奏が始まりました。あれ……このポップな曲調、そして時代を感じるロックで高い歌声……この曲は……相川七瀬の「夢見る少女じゃいられない」という曲だ！（ご存知ない方はYouTubeで観てみてください。たぶん、一度はテレビで聞いたことがあるはず）

このアップテンポで挑発的な歌詞に合わせて、何度も練習して体に染み込んでいるかと思われる振り付けを、カンピーナスの子たちが激しく、踊り、わたしたちは戸惑いながら必死でマネする。サビ部分は全員で「ユメミルショウジョジャイラレナイ フォー……！」と叫ぶ。はたし

て、この歌詞の意味が分かってるのか!!

一回踊ると、振り付けを覚え始めてだんだん恥じらいがなくなってきた人たちにとつては物足りない感があり、即座に二回目スタート。盆踊りのように輪になって踊るから「まつり・ダンス」なのね。盆踊りがブラジルに輸入されるようになるのか！朝から、教室で、相川七瀬。激しく踊る百人のティーン。

この日はたまたま東海大学のオープンキャンパスでした。この光景を窓の外から見た受験生と保護者は、どう思ったでしょうか。踊ってテンションがぶち上がった子もいれば、まだ困惑中の子もいます。その温度差が傍から見ると、また面白いのです。

もうセミナー終わったよね？ バイバイしなかったっけ？

グループワーク、発表と続き、少し真面目なセミナーモードに戻りました。時間も迫ります。さいごの締め、「感動の」ビデオダンス。まずは楽しい曲調に合わせてみんなで手を取り、教室内でぐるぐる回ったり、踊ったり。フィナーレでは「ありがとう」の気持ちを代わる代わる相手に伝えます。けっきょく、みんなハグをして、涙を流す人



が続出。別れを惜しんでるのか、一期一会に感動しているのか、それは人それぞれ。自分にしか理解できない感情が、それが溢れてくる感覚が、やばい（ちょっと違和感のある表現ですが、この形容詞がいちばんぴったりなのです）。が、しかしそのあと、予想外のやばい展開がありました。

セミナーのフィナーレを飾る集合写真を撮り終え、わたしは早々に片付け作業に入りました。教室では、まだみんなセルフイーしたり「Zzz」を交換したりしています。微笑ましい光景を横目で見ながら、わたしは隣の教室へ行き、文房具類などを手際よくしまえます。学生ボランティアたちも何人か手伝ってくれていました。しばらくすると、聞き覚えのある派手な洋楽が大音量で聞こえてきます。みんながいる教室からです。「Hey, Yo!!」とかいう声も聞こえます。なんだ、これは??

隣の教室を覗く。するとそこには、六本木のクラブ化した光景が。黒板の前に備え付けられたスクリーンいっぱいYouTubeで流行りのアーティストのPV（プロモーション・ビデオ）を流し、踊りまくる汗だくティーンたち。

MC（進行）兼DJ（選曲）を務めているのは、マルチカルチャーキャンプの常連の青年でした。上手い。ブラジルの若者に人気の曲がかかると、ホライゾン・ジャパン・インターナショナルというトルコ系の高校から来た少年が、「あ、この曲

知ってるー！ブラジルで流行ってる曲、予習してきたんだよね！」と言って大興奮。ポルトガル語で熱唱していました。

日本の公立中学校から来た女の子たち三人が帰り支度をして、「久美子さん、セミナーに参加させていただき、ありがとうございました」と、廊下にいたわたしのところへ丁寧に謝辞を述べに来てくれました。まだ息が上がっています。「あれ、もう一人、いっしょに来た男の子いたよね？」わたしが尋ねると、不満そうに「ああ。もう置いて帰ります。だってまだ踊ってるんですよ、あの人」と、教室を指さす。なるほど。そこには真剣にスクリーンを見つめて踊る少年の姿がありました。ワーとかウオーとかいう歓声がかかる度、三人は窓から教室を覗いて、うずうず。「いいの？もう少し踊っていかなくて」すると、「え、いいんですか?」彼女たちは持っていた上着とリュックをその場に置き捨て、教室へ走り戻っていきました。あの三人の中に、たしか生徒会長がいたつけ。

どのくらい時間が経ったのでしょうか。そろそろぜんぶ片づきたい。廊下に出した机と椅子をしまいたい。数人の学生ボランティアに指示する。「机、入れちゃって。」DJに耳打ちする。「次の曲で、おわり、いいね？」徐々にパーティータイムはフェードアウトし、机がどんどん教室を埋

め、踊るスペースはなくなっていました。よし。これで解散、だね。ちょっと強引だったかな。

わたしは一度退室して他の用事を済ませてから、再び教室に向かいました。合唱が聞こえる。曲は聞こえないけど、歌声がする。机に座ったティーンたち十人くらいが一台のスマホに耳を傾けながら、カラオケしているのです。まじか！これには、笑った。このエネルギー底なし。

セミナーという起爆剤

日本の中高生が帰ったあと、カンピーナスのティーンたちは、なんと今から街へ繰り出すと言いました。ベイジョ・メ・リーガの学生たちが引率して案内するらしい。わたしはもちろんパス。せっかくの日本だもん、楽しんできてね。

毎年生徒を連れて参加してくれている県立高校の先生が言いました。「セミナーに来ると、ああ、今年も夏が来たなうって思うんですね。」ティーンたちは、言葉が通じなくても、文化がちがっても、出会ってしまえば、なんにも心配はいらない。緊張と戸惑いが最後まで抜けない子ももちろんいます。だけど、今回は、カンピーナスの子たちが日本の裏側からもってきたエネルギーによって会場の雰囲気すべてが飲み込まれ、セミ

ナーはジャックされました。ブラジル・パワーというやつにやられてしまったのです。

そのパワーは、セミナーでの体や心をつかったゲームや出会いのアクティビティという起爆装置によって爆発しました。一度火が付くと、それは数時間続くことを知りました。そして、それはたまに収拾がつかなくなることも学びました。きつと、その火は、ティーンたちの心に宿り、サイコーに楽しい記憶として永遠に残るんだろうと思います。

五回目のセミナー。そろそろ一人で企画、運営するのは辛いな……と感じつつ、来年はどんな回になるかなあ、とわたしの心にも灯ったエネルギーは、もうじわじわと温まりはじめています。

UNESCO ユースセミナー 2019
ダイジェストビデオは
こちらからご覧ください！
<https://youtu.be/05UwBbbWhkA>



『彩とりどりの子どもたち』

活動報告

川原翼



秦野市立南小学校での教員研修。先生たちに日々の取り組みについて話し合ってもらった。



第3回彩とりどりの子どもたち。パワフルな小島祥美先生に圧倒されました！



グループワークにて。様々な所属の人たちが集まって、話し合いました。



当事者の貴重な意見も聞けました。

前号でもお伝えした秦野市在住の外国につながる子どもたちへの支援プロジェクト『彩とりど

りのはだの』ですが、その後も活動を継続するにあたり、活動領域が秦野市だけでは収まりきらなくなってきたので、より広域に活動を展開していくように、名称を『彩とりどりの子どもたち』に改めました。

十二月二十一日(土)には、カナダのトロント大学からバイリンガル教育の権威、中島和子先生をお迎えして、「子ども」の視点から日本語教育について考えることをテーマに、「日本語教育推進法に関する国際フォーラムinかながわ」を開催しました(別記事で詳細掲載しています)。

また、今回は、この『彩とりどりの』を始めるきっかけを作ってくださった『はだの子ども支援プロジェクト「ゆう」』の三田村晴美さんにもご自身のライフストーリーを交えて記事を書いて頂きました。日本に暮らす外国籍の方々を取り巻くリアルな状況、それを何とか救おうと奮闘してこられた苦労や喜びが詰まっております。ぜひ、ご一読頂ければと思います。

ればいいか分からない、担任とうまくコミュニケーションを取れないなど

5 年間行事・カリキュラム 年間でどんな行事があるか知りたい、どんな内容を学習するか知りたい、子どもの生活・学習にもっと寄り添いたいなど

否定的な意見ばかりではなく、中には「親がもっと学校を理解しようとするのが大切」と前向きな意見も聞くことができました。

小学校教職員へのワークショップ(研修会)の開催

七月二十六日(金)には、秦野市教育委員会の協力のもと、秦野市立南小学校の教職員に向けて、外国につながる子どもたちをテーマにワークショップ型の教員研修会を開きました。

南小学校の職員四十名に加え、市内の他の幼小・中学校からも二十名ほどの先生の参加がありました。二〇一九年六月末から施行された日本語教育推進法について触れたあと、前述の聞き取りで分かった外国籍保護者の困っていることを伝えました。そこから、「外国につながる子どもたちのことで困ったことは?」、「先生たちがしている工夫は?」、そして「私たちに今、必要なことは?」というテーマで何度かグループを変えながら話し合ってもらいました。

このワークショップは本当にやってよかったで

外国人住民(保護者)への聞き取り・実態調査

前号の活動報告からの進展としては、『彩とりどりの子どもたち』に関わるメンバーで手分けをして、秦野市在住の外国人住民に聞き取りで実態調査を行いました。外国籍保護者の方々が、日本で生活していく中で、また子どもの教育に関してどういったことに困っているのか、課題を持っているのかというのを聞き出しました。その結果、外国籍保護者が困っていることを大きく五つに分けることができました。

- 1 お手紙** 学校からの手紙が多すぎる、大切なことが何か分からない、日本語が読めないなど
- 2 PTAの活動** 参加したくても仕事でできない、内容が分からない、日本の学校文化が分からないなど
- 3 国際教室** 何をしているところか分からない、課題を抱えている子が優先されてしまうなど。一方で、国際教室の存在について、子どもたちにとって必要な場所であるなど肯定的な声も多かったことも事実です

4 先生(学校)との関係 困ったときにどこに相談す

す。私が知る限り、「外国につながる子どもたち」をテーマに文字通り膝をつき合わせて話し合うような機会は今までありませんでした。校長・教頭など管理職、国際教室担当、学級担任と一緒に外国につながる子どもたちについて話し合うことで、問題意識を教員間で共有することが出来ます。まず、そこからスタートすることが今、最も必要で、大切なことのように思いました。

研修会の最後に先生たちからこんな声が聞こえてきました。「問題を改善するために、行政や教育委員会に対してハード面やシステムの改善を訴えていくことは時間もお金もかかり難しいけれど、まずは、我々教員の意識を変えていくことは今日からでもできる。」

外国につながる子どもたちについて話が出たときによくあるのは「そうは言っても、日本人の子どもで大変な子はもっとたくさんいるよ」という意見にかき消されてしまうことです。でも、今回のワークショップのように、改めて話してみると、「やっぱりみんなそう思っていたんだ」とか、実は地道に様々な工夫をしている先生もたくさんいて、そういった問題意識を共有することで、「たしかに、外国につながる子どもたちのこと、もっと何とかしなければ!」という意識が先生たちの間で広がっていけば、外国籍の子どもたちがもっと過ごしやすい教育現場に少しずつ変わっていくと思います。そういったこれからの希



会終了後の集合写真。サブリナさんのボサノヴァの演奏のおかげもあって、リラックスムードのとてもいい雰囲気。



サブリナさんのボサノヴァの演奏で一気に雰囲気がブラジilmードに！



各グループの発表。様々なアイディアが出ました。

望が開けていくような研修会になりました。できれば、同じような研修会を他の学校でも継続的に行っていければと思います。

第三回彩とりどりの子どもたち 講演会&ワークショップ

八月二十五日(日)には、小田急線「東海大学前駅」のタウンニュースホールにて、愛知淑徳大学の小島祥美教授をお迎えして、「未来の日本を担う「外国につながる」子どもたちのために」というテーマで講演会とワークショップを行いました。東海大学とタイアップして、秦野市と教育委員会の後援を受けて実施することができました。小島先生は、愛知県の可児市にて外国から来た子どもたちが日本の学校に入る前に日本語や日本文化を学ぶための初期日本語指導教室「ばら教室KANZI」を立ち上げた方です。

市内・市外、様々な団体・所属からの参加者があり、参加者総勢八十名、大盛況のうちに終わりました。アンケートでも、講演会&ワークショップの満足度はほとんどの人が百パーセントと書いてくれました。何よりもメインスピーカー小島祥美先生の話がとても情熱的でパワフルで、素晴らしい!!の一言。圧倒されました。

小島先生は、元小学校の教員。震災後の神戸で、学校に通っていない不就学児童との出会いを通

たちがいる事実。これからもっと増えるかもしれない。日本に住むすべての子どもたちが、「日本に來なければ良かった」ではなく、自分の個性を出しながら、日本で暮らして幸せだと思えるような社会にしていきたい。改めてそう思いました。

講演会とワークショップのはじめと終わりに、小貫大輔さんの友人のブラジル人シンガーのサブリナさんのボサノヴァコンサートが会を素敵に演出してくれました。さすがブラジル! 硬い雰囲気が一気に和み、おかげで終始、あたたかい雰囲気に包まれた素晴らしい講演会になりました。

外国籍保護者のための小学校教育の勉強会

外国籍保護者への聞き取り調査で、日本の小学校教育にたくさんの疑問や不安があることが分かりました。また、子どもの宿題を見たくても、自分たちが受けてきた教育と、日本の算数のやり方が違うから、子どもに勉強を教えられない! そもそも、日本の小学校ってどういう風に子どもに教えてるの? という声をたくさん聞いて、その声に応えるべく、八月の終わりから始めたのが、「外国籍保護者のための小学校教育の勉強会」です。今まで、月に一度のペースで、三回の勉強会を行ってきました。

これが、とっても楽しいのです!!

して、問題意識を持ち、その後、岐阜県可児市に出会い、外国人の子どもたちの「不就学ゼロ」を目指して、地道な活動を続けてこられました。

可児市の全外国人家庭を自らの足で調査した結果、全体の三割の子どもたちが不就学になっていることが判明し、中には児童就労に関わっている子どもたちがいることも分かったそうです。

当時の可児市の教育委員会や、校長に関わり、市長を口説き落として、「不就学ゼロ宣言」を取り付け、日本語初期指導教室「ばら教室KANZI」を立ち上げ、実際に不就学ゼロを実現。全国の自治体や学校で初期日本語指導の立ち上げにも関わり、高等教育を見据えたキャリア教育などにも携わっております。小島先生は語気を強め、こう言うっておられました。「外国人の子どもたちが学校に行けなくなるのは、本当の理由は、いじめではなく、自分の存在を認めてくれなかったからなんです!」

日本人も、外国人も関係なく、どの子どもたちにとっても自分のアイデンティティを発揮することができて、認められる居場所づくりが大事。そのために、学校だけではなく、地域や、地域で活動する様々な学習支援の民間グループや、行政が垣根を超えて情報を共有して、連携していくこと。

我々、教員は目の前にいる子どもたちには全力になるけれど、実は社会から「見えない」子ども

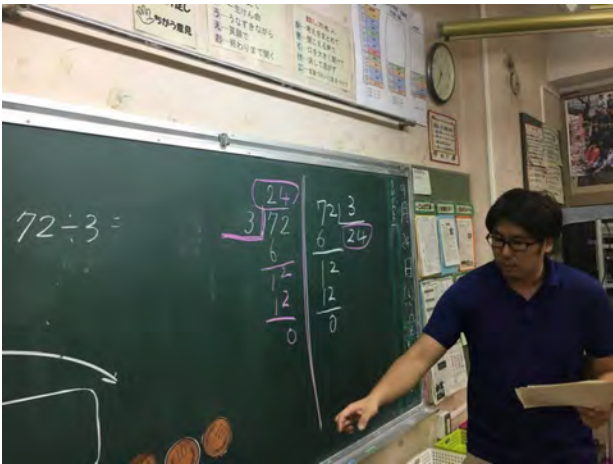
初回は、保護者の方々が仕事が終わってからでも駆けつけられるように夕方六時にスタート。私が勤める秦野市立渋沢小学校で行いました。算数の基礎となるかけ算について、かけ算の概念、具体物↓半具体物↓抽象物という授業の流れ、教科書の見方、九九についてなど、二時間かけてじっくりやりました。

約一か月後に行った二回目は、わり算の筆算や国語の音読について行いました。しかし、平日夕方の開催は、働いている保護者の方々には参加が難しいようで、参加者が激減してしまいました。前号にも登場した秦野市のブラジル人教会の牧師であるマルシオさんに相談して、三回目は学校を飛び出して、マルシオさんの教会の日曜日礼拝後に出張授業を行うことにしました。その結果、たくさんのブラジル人保護者の方々が興味を持って聞いてくれました。三回やって三回ともなのですが、保護者の方々から出る質問に答えていくことが、日本人側も新しい発見があって、とてもおもしろいです。今までの三回で出た主なものをまとめて記載します。

◎ 日本の数字は、四を「よん」と言ったり、「し」と言ったり、七を「なな」と言ったり、「しち」と言ったりする。かけ算九九のときは、四↓「し」、七↓「しち」と読む。四を「し」、七を「しち」という読み方は中国から入ってきた読



外国籍保護者のための授業。かけ算の九九について説明しています。



日本と外国、わり算の違いについて。

み方。四を「よん」、七を「なな」という読み方は日本古来の読み方。日本の先生はそこをあまり意識せず教えていて、二つの読み方が入り混ざって教えられるので、外国につながる子どもたちはそこに混乱する。

◎ わり算の筆算は、国によって違い、ブラジルを含む中南米、ヨーロッパなどの国々は日本とは違うやり方。

◎ 小数点を「ピリオド(・)」にするか(これはアメリカと日本のやり方)、「コンマ(、)」にするか(これはヨーロッパやブラジルのやり方)の違い。分数の読み方も日本と外国では逆。

世界共通で学ぶ算数一つとっても、日本と外国ではシステムや教え方が大きく違って、それが国や文化を越えてやってきたときに、子どもたちにとっては大きな壁になります。ましてや、日本と外国では算数の教える進度も大きく異なる(例えば、かけ算は日本では二年生から学び始めますが、ブラジルでは三年生か四年生で学び始めるようです)ので、ブラジルから三年生で日本に来た場合、かけ算を全く学習していない状態でわり算の学習が始まってしまいうわけです。

外国から日本に来る子どもたちは自国で習ったやり方とは全く違う方法で、日本の学校で学習を進めなければいけません。同じく外国籍保護者も、日本のやり方が全く分からないため、抵抗感

があり、自分の子どもの宿題も教えられない。

毎回、議論が巻き起こり、それがとても有意義な時間で、外国籍の保護者の方々はとても満足されて笑顔で帰っていきます。この活動が、少しでも子どもたちが学校に通いやすくなることに繋がればと願っています。地道ですが、続けることに意義があるので、これからも続けていきます。今は、マルシオさんに協力して頂いているので、ブラジル人保護者を中心になっていますが、そのうちブラジル以外の増加しているペルーや、ベトナム、フィリピンなどの外国籍保護者の方々に向けてもできればと考えています。引き続き、ご報告します！

教育委員会、近隣の東海大学や上智短大、外国人児童の人権や学習支援サポートを行うNGOや学習支援グループなど様々な機関、人々を巻き込んでどんどん大きな活動になってきました。二〇二〇年も、日本に暮らすすべての子どもたちが少しでも幸せに暮らしてけるように、Think Globally, Act Locallyの精神で、足元から行動していきたいと思っています。

彩とりどりの花園を夢見て 多文化社会に向けての小さな一歩 in Hadano

三田村晴美

秦野に来るまで

はだの子ども支援プロジェクト「ゆう」の事務局長、三田村晴美です。神奈川県秦野市に住むようになって二十八年が経ちました。

夫の会社の新工場開設で、社員と家族がこぞって京都から移動して来たのが、一九九一年のことでした。秦野の片隅に関西出身者の職住共通のコミュニティができて、考えてみると、外国籍市民の皆さんと同じで、私たちも不安と希望を抱いて生活を始めたわけです。

自宅の中では、奥さんたちが、イントネーションも気にせず、大きな声で笑い話し、秦野市内の新しいお店を紹介し合ったり、生活の情報を交換したりしていました。しかし、一步社宅マンションの外に出ると、様々な「違い」を感じ、失敗談

や武勇伝？を披露しあいながら、少しずつ秦野での生活を組み立てていったことを昨日のことのように覚えています。

子どもたちは、家では関西弁、幼稚園などでは標準語や秦野言葉で話し、バイリンガルやね！と皆で言い合ったものでした。このように、私自身が、秦野では「新参者」「移住者」として、二十八年生活してきたのです。しかし、子どもたちの一人は秦野で生まれ、二人とも秦野の地を自分のふるさとと感じて成人しています。

私の人生を少し振り返って、ご紹介したいと思っています。私は、京都府の北部、丹後ちりめんでは有名な地方で生まれました。大学生になるまでは、同じ京都とはいえ、僻地と言われる京都府の最北端で生活していました。日本三景の天橋立よりももっと「奥」です。差別語と言われる「裏日本」の典型。都会からは遠く厳しい自然環境の地域で

すが、考えてみれば、日本海を挟んで大陸に向き合っているわけです。古い時代には、日本の玄関、表舞台だったのかもしれませんが。私は、子どもの頃から、地域にある「古墳」や「浦島伝説」をきっかけに、朝鮮半島や中国文化と自分の地域のつながりに関心を抱いていました。

大学生の頃には、京都で在日コリアンの方々の情報をしばしば耳にする環境にありました。京都市内で、大学を超えたカトリック教会に関係する学生のグループで活動をしていたからです。私が大学生の頃、ベトナム戦争後のインドシナ難民の問題が発生し、ポートピアプルの支援などについて、周囲から聞く機会も多くなりました。

同じ時期、学生グループの関係で、フィリピンで行われた信徒養成のセミナーに参加する機会がありました。そこでは、主としてコミュニケーションオーガニゼーションの理論を学び、その動きをつくるコーディネーターやファシリテーター

ターの必要性が言われ、実際にスラムや地方の村で活動するフィリピン人のコア人材の養成がなされていました。私は、英語ができないので講義にはなかなかついていけなかったものの、そのときのテーマの大切さははっきりと心に刻まれ、そこで出会ったフィリピンの人々の温かさ、ホスピタリティーによって、自分の心が大きく広がる体験をしました。

大学を卒業して、京都で働いていた時期には、ちょうど「じゃばゆきさん」と呼ばれるフィリピン人シンガーやダンサーの存在、日本人による搾取の問題がとりあげられる時代で、私は京都市内のカトリック教会の地域連携の関係で、そのようなフィリピン人タレントの方々が、月に一度集まる英語ミサを提供するチームに属して活動していました。自分はそれからずっと京都で生きていくと頭から信じて疑わず、生活していました。

しかし、二十代の後半、結婚して子どもが誕生してすぐ、夫の会社の都合で、青天の霹靂、神奈川県秦野市への異動が決まり、その前に二年間、アメリカのフロリダ州ゲインズビルという大学町に派遣されることになりました。一九八九年、九一年です。一歳の子どもを連れて、英語の話せない若い母親として生活したアメリカ南部では、日本人コミュニティの支え合いと南部フロリダらしい、おおらかなりタイアした近所の高齢者

の存在で、楽しく過ごすことができました。しかし、何より、言葉ができないことは不安でした。子どもが熱を出すと、小児科のクリニックに電話して、予約することすら怖かったものです。小児科という英単語を辞書で探すことからの作業でした。そんな中、市内で提供されていた、宗派を超えた教会同士の連携で成り立っていた外国人向けの「英語教室」に参加したこと、そこでは、私が支援される側だったことは、今の私につながる貴重な経験でした。

今に至る歩みの一歩

秦野に来るまでの話が長くなりました。アメリカから帰国後、秦野に引っ越し、冒頭のような秦野における移住者体験を経て生活するうちに、私は自分の子どもを通う秦野市内の小学校の同級生に、外国出身の子どもが、それも東南アジア系、南米系の子どもたちがちらほらいることに気付くようになりました。

その後、縁があって、当時の上智短期大学（現在の上智大学短期大学部）で学生さんたちが長く行ってきた「家庭教師ボランティア活動」（現在は、サービスマーケティングセンターのコミュニケーションフレンドの活動）のコーディネーターの仕事をしていただくこ

ペイン人の故ロサ・マリア・コルテス先生という修道女が、一九八〇年代の後半から、インドシナ難民の地域受け入れの中で生まれた学生の動きを支え、継続していた活動でした。私が関わった当時で、すでに二十年近い活動の蓄積がありました。

とはいえ、支援してきた学生も、指導のコルテス先生も、だんだん拡大していた支援対象の八十家庭を網羅して把握できている状態ではなく、私

の前のコーディネーターが始めていた全体の把握の作業を継続し、四年の仕事の間には、それらの家庭を定期的に訪問して各家庭の状況を聞き取り、ご自身が外国籍市民でもあるコルテス先生の足となって、保護者との信頼関係を築くことに努めました。

その時期、非常に印象的だったのは、外国出身のご家庭では、よほどのことがない限り、訪問する私たちを快く迎え入れてくださることでした。外国人の皆さんからは、多くの場合、「日本人となかなか友達になれない。来てくれてありがとう。嬉しい。」と言われました。

その時期を経て、仕事としての担当期間を終了しました。その後、四年間の疲れが出たような時期もありましたが、そんな私を呼び覚ましてくれたのは、中学生になった元家庭教師ボランティア派遣先の子どもたちでした。

東日本大震災のあと、まだまだ日本中が混乱していた時期のことです。中学生になった秦野市の南地区に住む外国人の子どもたちが、「三田村さん、大学生の代わりにうちに来てくれないですか？」と言ってきました。中国人の女の子とボリビアの女の子でした。「上智短大が新しく始めた学習拠点には、私たちだけで通うことができない。」という理由でした。

確かに、親御さんが車で送り迎えのできない家



1980年マニラにて。サンホセメジャーセ
ミナリーの学生たちと日本人大学生。

庭でした。その二人が、中国人の女の子の家で勉強するから、レポートやテストの勉強を見てほしいという話でした。

学生を派遣していたそれまでとは違い、自分が中学生の学習を支援することについては、私はどうしたらよいかと躊躇しました。一人ではきつと行き詰ると思いました。そこで、自分の子どものこととお世話になっていた、音楽関係の活動で、地域の子どもたちと長年関わってこられた伴奏専門のピアニストの知人に、一緒に外国出身の子どもたち対象の学習支援をしていただけないか……とお誘いしました。小さな、今に至る歩みの一歩が始まりました。二〇一一年秋のことでした。

捨てる神あれば拾う神あり

子どもたちの学習に寄り添い始めると、保護者の課題、家庭と学校の先生方の関わりの課題がすぐに見えるようになりました。子どもたちだけでなく、お母さんやお父さんたちが、学校や地域生活に必要なことがわからず、尋ねる先は市役所や学校に限られ、市役所職員の方や通訳の方との一対一の関係の中、気持ちや情報が一歩行き違うと、不信感や挫折感、人間としての自尊心が損な

われるような経験をする場合があることが見えてきました。

もちろん、誰が悪いということではないのです。子どものことならば、親も先生方も市の方々も、「これが大切」というそれぞれの軸に従って行動しているのです。しかし、思いや考えのやり取りが行き違うことによって、互いに相手を責める状態、気持ちになっっているケースが多いことに、改めて気づきました。

私自身が、英語のわからない外国人として生活していた二年間の経験から、その気持ちは本当によくわかると思いました。アメリカで、バブル最盛期に「日本人」とひとくくりにされ、批判され、悲しい思いをした、たった数回の出来事でさえ、いまだに心の痛みとして残っています。素晴らしい出会いの数々の中にあってさえ、その記憶は痛みとしてはっきりと覚えています。秦野に住まう外国人の中には、それが日常のようになっている方もあるということを知りました。大人たちの行き違いの間に立つと、特に、中学生年代の子どもたちは、両方の言葉がわかるがゆえに、苦勞しているという現実もありました。

また、活動を始めた頃は、学校とつながることは、とても大きな壁でした。管理職の先生たちのご理解が得られると、すんなりと受け入れていただけの学校もありましたが、私たちが「個人」と

二〇一二年夏のことです。

その生徒たちの中には、この時初めて、夏休みの宿題を提出できたと言っている子がいました。その後、田口先生とTICCの学生の皆さんと私たちの連携、協働の歩みが始まりました。放課後の家庭での学習参加者は、ますます増えていきました。急な人数の増加で、個人の家庭での学習支援に限界が見えました。当該の中学校の校長先生が事情を伝えるとご理解下さり、放課後の国際教室を使わせていただき、大学生と一緒に勉強できることになりました。

けれど、それは長く続かず、校長先生が退職されたあとは、再び子どもたちと学生が放課後学習の場を探して、あちこちウロウロすることを余儀なくされました。中学生たちが「学習している」ということは評価され、表面的には認められるのですが、いろいろな点で、公的な施設利用の難しさがありました。私たちにはよく理解できない進言が水面下であつたらしく、秦野の公共施設での学習の場を追われた経験もありました。

しかし、「捨てる神あれば拾う神あり」という日本の諺の通り、学習支援の場所は、大学生の活動に対するご理解のあつた南公民館の職員さんたちのご協力で、何とか継続できることになりました。以後、場所としては、現在に至るまで南公民館を使うことができています。「いつもここにこしているティーチャーのいる教室」という意味



1990年 アメリカ マイアミビーチにて
小旅行

して活動していることを知られると、先生方は「生徒の個人情報が……」とおっしゃって、「あなたたちは、どういう立場や資格で、こういうことをしているのか?」と不信感をあらわになさる場面のほうが、多くありました。

そのような日常でしたが、子どもたちと学習し、ときには、そのおうちで、ささやかな料理を作り、子どもと大学生、皆で一緒に食べたりもしました。家庭科の予習、復習だね?と言いつけながら。子どもたちは、両親が仕事で遅く帰ってくるため、夕食が遅かったり、遅い時間にもかかわらず、小さな子たちも一緒に家族で夜間に大規模な商業施設にでかけたりしている様子である

で、子どもたちが名付けた「にこティー教室」の始まりでした。二〇一二年の秋でした。

「ゆう」の立ち上げ

子どもたちが放課後集まる場所がなかなか見つからなかった時期、その代わりに……ということ放課後ではなく、中学校の国際教室に、数名の支援者が入ることが中学校から提案されました。その時間帯は、大学生は授業だったため、大人の協力者を探しました。このとき協力くださった方々が、その後、私たち「ゆう」の立ち上げの際に、コアメンバーになってくださいました。

また、秦野ホーリネスキリスト教会の日本人牧師さんが、同じ系列の外国人の方々の子どものための学習のことで相談をしてくださり、子どもたちを紹介くださったのですが、その牧師さんが必要ならば……と、私たちと一緒に、中学校に入って支援することに加わってくださいました。ご自身の貴重な時間を私たちと共に過ごしてくださいました。

その牧師さんとの出会いが、のちに、今の私たちの活動のひとつ「めぐみ日本語教室」につながるとは、そのときは思ってもいませんでした。しかし、この国際教室に入りこんでの活動も、翌年

には、該当する外国籍の生徒の人数がいなくなつたから（私たちが知っている限りでは、外国ルーツの生徒はいいましたが、国際での学習が必要という申し出がなかったようです）ということで、その学校に国際教室が設置されないこととなり、中止になりました。

以来七年余り、秦野市南公民館での活動「にこティー教室」は、日々の様々な出来事、喜んだり困ったりを繰り返しつつ、TICCの学生さんたちの団体としての力強い働きを得て、充実してきました。当初は予想しなかった素敵な実りになりました。私たち大人だけでは、けっして今の状態には至れなかったと思います。

次には、鶴巻方面でも学習支援が必要という声が聞こえてきたため、二〇一五年にはつるまき学習支援教室が生まれ、翌年には、私たちの活動も学生さんたちに倣ってグループ化しようということになり、二〇一六年はだの子ども支援プロジェクト「ゆう」となりました。

はだの子ども支援プロジェクト「ゆう」は、現在発足四年目に入っています。活動は、秦野にとどまらず、近隣の市町にも少しずつ拡大してきました。二〇一八年度からは中井町で、学校とつながる動き、同じく二〇一八秋からは、伊勢原で放課後支援の動きなどを行っています。また、同じく二〇一八年六月、新たな一歩が始まることになりました。

彩とりどりのほだの

ある日のことです。にこティー教室が終わった時間、子どもたちのお迎えに来ている保護者の皆さんが集まって話をしているところにつかりました。ブラジル人保護者の方々でした。

いつも子どもさんたちを送り迎えしている真面目そうな若いお父さんとお母さんが、ブラジル人の保護者の話の中心になっておられました。秦野ホーリネスキリスト教会の牧師 上山マルシオさんでした。それまで三年近く、お嬢さんたちがにこティー教室に通ってきていたのに、マルシオさんと直接じっくりお話をしたのは、ほぼ初めてでした。以前、中学校の国際教室の日の支援に協力してくださっていた日本人の牧師さんとおつながりのある方だと、そのとき初めてわかりました。

新しく秦野に住むブラジル人たちが、自分の周りで増えてきている。これからも、もっと増えるかもしれない。特に、学校のことなど親は心配なので、自分にできることがあれば……と思って、市役所に行った。しかし、市には通訳さんがいるので、その方々のお仕事を優先するため、ボランティアは受け入れできない……というのが、その時の窓口の答えだったらしく、とても残念だった



1994年社宅にて

というお話でした。

このブラジル人の方々の声、そして、日本語とポルトガル語を話し、実際の必要性を身をもって感じておられるマルシオさんの問題意識を何とか形にしていきたい、していくべきだと「ゆう」のコアメンバーで話しました。そこから、私たちとCRIの川原先生、小貫先生との出会い、協力協働の日々が始まった次第です。

に、保護者と一緒にやってくる子どもたちの学習支援教室ベイジーニョも開始しました。

第三回は、二〇一九年八月二十六日、愛知淑徳大学の小島祥美先生をお招きして、タウンニュースホールでの講演会とワークショップを行いました。このときは、小貫先生のご人脈で、ボサノヴァの演奏を聴くこともできて、とても実りある心温まる企画になりました。第三回のあと、CRI代表の川原先生が、現役の若手の小学校の先生として始めてくださった外国人保護者のための授業という実践があります。すでに三回行っています。この実践が、今後どのように展開していくか、今は、とても楽しみです。

「人」の力、「人」のつながり

長々とこれまでの私個人の目線軸で、「ゆう」の歩み、CRIとの出会いを記してきました。こうやって振り返ってみて、多くの出会いの不思議と人と人がつながることの大切さを改めて感じます。

私たちは、よく「仕組みが」とか「予算が」とか言います。もちろん、それらは大切です。しかし、公的な立場の方々は、ともすればそこで終わってしまします。

大切なのは、その仕組みや予算を生み出し引き出す「人」の力、「人」のつながりであることを私は強調したいと思っています。その力もつながりも、口を開けて待っていてもやってきません。身近で小さく動き続けること、小さな出会いを重ねることと出会いを心から喜ぶこと、それがあってこそ大きな意味での「ときを待つ」につながる……と、川原先生と小貫先生との出会いをいっていて、今の私を感じていることです。これから、CRIとの連携を重ねて、素敵な仲間が増えていくことができれば、本当にうれしいことです。これからも、よろしくお願い申し上げます。

第一歩は、「彩とりどりのほだの」という形で、地域の関係者が現実を知り、学ぶ機会を提供しようということでした。

二〇一八年夏、まず第一回彩とりどりのほだのを本町公民館で行いました。外国人受け入れの日本のこれまでと現状について、もう一度改めて見直すことから始めました。マルシオさんの体験とお考えをお聞きしました。結果、二〇一八年秋には、秦野市内の小学校の国際教室に、マルシオさんが私たちと一緒に関わってくださいることが実現しました。同時に、大人の日本語教室の実現に向けての試行も始めました。

その後、第二回を二〇一九年一月、堀川公民館において行いました。このときには、実際に身近で起こっているケースや自治体による対応の違いなどを学生さんたちのレポートを中心に皆で学びました。そして、このときも、外国人保護者の実際の思いや体験をお聞きしました。集まった方々は、それぞれ違う立場や役割でしたが、皆が一致していたのは、何より、当事者の声を聴くことの大切さでした。

二〇一九年度からは、「ゆう」としての小学校に入るボランティアは、秦野市以外も含めて四校に広がり、二〇一九年四月からは、マルシオさんの教会を場所としてお借りして、めぐみ日本語教室という大人の日本語教室を始めました。同時



第1回「彩とりどりのほだの」の会



「ゆう」の勉強会

日本語教育推進法に関する国際フォーラムinかながわ

「子ども」の視点から日本語教育について考える

二〇一九年十二月二十一日(土) JICA 横浜にて、タイトルのとおり『日本語教育推進法に関する国際フォーラム』を開催しました。

このフォーラムを開催するに至った理由には、昨年六月二十八日に「日本語教育の推進に関する法律（日本語教育推進法）」が公布・施行され、「多様な文化を尊重した活力ある共生社会の実現」を目的に、国と自治体がその責務として日本語教育を推進していくことが明言されたというのがあります。

これまでは、「義務教育の対象外」とされてきた外国籍の子どもたちについても、日本語や教科の指導を充実させるために、教員配置の制度を整備し、教員養成・研修を充実させ、就学支援その他の必要な施策を講ずるとして、国や自治体が積極的にかわる姿勢が示されました。多文化共生への法制整備の第一歩とも言える法律で高く評価されます。

また、この法律は、「海外に在留する邦人の子女等」の日本語教育にも触れています。日本や海外で複数の言語に囲まれて育つ子どもたちの教育

に関わる法律であり、具体的な施策のあり方次第では、日本語を含む複数言語を身につけた「グローバル人材」の育成にもつながりうる重要な法律だと言えます。

しかし一方で、子どもと大人の日本語教育を同時に扱っていることから、誤って運用されると、言語形成期にある子どもの認知力と心身の発達に予期せぬ悪影響を与えかねない懸念もあります。すでに言語が確立している大人と異なっており、子どもは心身の発達過程にあり、まさに言語能力そのものを育てている時期にあるため、大人への日本語教育とはまったく異なった視点と指導アプローチが必要だからです。

今回のフォーラムでは、この法律を「子ども」の視点から見直し、複数の言語環境で育つ子どもたちにとって、本当に必要な日本語教育推進の施策とはどのようなものであるかということを見直しました。そして、国が二〇二〇年六月までにまとめるとしている「日本語教育の推進に関する国の基本指針」などを通じて、今後の施策に反映

川原翼

させるために、提言として取りまとめることを試みました。

トロント大学の中島和子先生をメインスピーカーに迎え、「多文化環境で育つ子どもの言語発達——日本に資する支援のあり方とは？」をテーマに講演をして頂きました。中島和子先生はバリンガル教育や継承語教育の第一人者であり、遥々カナダから来日していただきました。提言をまとめる上で、海外に暮らす日本ルーツの子どもへの日本語教育という切り口として、とても大切なメッセージを受け取ることができました。会場いっぱいに集まった参加者は熱心に中島和子先生のお話を聞き、その真剣な姿勢が印象的でした。その後、「小さな子ども」「学校」「外国学校」「海外」の四つの分科会に分かれ、「日本語教育推進法を子どもの視点から考える」ことをテーマに、それぞれの視点から「提言」に盛り込むべきだと考える具体的な内容について話し合いました。

フォーラムには、日本全国、そして海外からも様々な方々に参加して頂き、盛会に終わりました。約六時間の長丁場でしたが、会場は参加者の熱気に包まれ、参加者一人ひとりの「目の前の子どもたちの状況を何とかしたい」という真摯な想いが、ひしひしと感じられるとも内容の濃い時間となりました。今回のフォーラムで抽出された様々な人々の想いが、新しくつくられた法律の基



～「子ども」の視点から考える～「日本語教育の推進に関する国の基本方針」への10の提言（要約）	
2019年12月21日 JICA 横浜センター（神奈川県）にて「日本語教育推進法に関する国際フォーラム inかながわ」参加者一同	
【編者】日本語教育推進法は、多文化共生への法制整備の第一歩ともいえ、グローバル人材の育成にもつながる重要な法律。能力、子どもと大人を同時に扱っていることから、その運用を誤ると、言語形成期にある子どもの認知力と心身の発達に予期せぬ悪影響を与えかねない懸念もある。特に忘れなければならないのが、「母語」が果たす役割の重要性である。上を踏まえて以下の10の提言をする。 1 乳幼児期の母語の重要性の認識と多文化・多言語子育てへの支援を ・保護者が自信をもって子育てできる言語（母語）を家庭で使うことの重要性を啓発する。母子保健、医療、幼児教育、生活支援の関係者や地域社会が複数言語環境での子育てについて正しい知識と態度を持ち、多文化・多言語子育てへの支援を。 ・外国人家庭に子どもへの言語発達についての冊子を配布。母子健康手帳で母語の重要性について説明し、会話の目安となるキーワードを言語別に明示する。保育所・幼稚園・子ども園などに母語の絵本を揃え、母語での読み聞かせを。 2 就学準備のための施策の空間展開を ・就学準備の始末期に日本語学習と学校に慣れ親しむための「就学準備教室（プレスクール）」を開設する。学期期に入ってから編入する子どもたちには「編入準備教室（アダプタス）」を。保護者が一緒に授業を受けられるようにすることも有効的。 ・保育所・幼稚園・子ども園では、日本語の学習を意図して日本語での絵本の読み聞かせを、不慣習児への対応も。 ・多文化・多言語子育て支援・プレスクール・アダプタス設置のためのガイドラインを作成し、自治体や人材を確保・育成するように促す。国の関係機関（厚生労働省子ども家庭局、文部科学省初等中等教育局幼児教育課、内閣府子ども子育て本部、国立教育政策研究所幼児教育研究センターなど）、日本語・母語バイリンガル教育関係者が相互に連携を。 3 外国籍の子どもへの就学の促進と「教育への権利」の保障を ・外国籍の子どもの「およそ6人に1人が義務教育年齢で就学していない可能性」という事象への対策が急務。公立・私立の学校（一校）や外国学校への就学を促進し、日本語学習の機会の確保と、「教育への権利」の保障。学年と年齢の間に差がある場合も、学齢超過などを理由に義務教育を修了できないことがないよう柔軟な受け入れを。 4 日本語指導を必要とするすべての子どもへの日本語学習の機会の保障を ・「日本語指導を必要とする児童生徒」すべてに日本語学習の機会の保障。『日本語指導に必要な教員支援（日本人に1人）』を国は確実に実現し、自治体はさらに多くの教員を正確に確保する。『教育への権利』を実現し、日本語指導の質を高める。教科としての「年少者日本語教育」を開設し、教員養成課程に「年少者日本語教育」や「多文化共生教育」を必修を設け、教員養成課程・別任科課程・現職教員研修でも「多文化共生教育」を必修とする。	5 子どもの生活歴や言語環境に応じた対応を A-1 日本生まれ・乳幼児期に来日した ・母語を第一言語として育った子どもへの支援 ・日本語での日常会話が容易になるまでに1～2年、学習困難が身に付くことは少なくとも4年。母語の基礎が弱い場合は7年か10年かかることもある。母語の力を継続して伸ばすことが日本語学習の土壌となる。学校現場では母語支援者の待遇を改善し、さらなる人材を確保・養成する。日本語の指導力やカウンセリング能力を高める研修を。 A-2 日本生まれ・乳幼児期に来日した ・母語よりも日本語の方が優勢になっている子どもへの支援 ・日本語も母語も低レベルで概念がはっきり把握できていない場合、スキマ・フォールディング（足場組み）をして日本語を通して学力を高める必要がある。学校では特別支援科が単なる「隔離教室」にならないよう、年少者日本語教育の方法を確立し、専門家が対応できるようにする。 B 学齢（小学校）期になってから来日した子どもへの学校教育における支援 ・教科統合型の日本語学習の支援や、母語によるサポートや子どもの気持ちに寄り添った理解サポートが必要。中学以降の子どもには、日本語学習や教科の学習で母語を通して支援があれば理想的。自分のペースに対する誇りやアイデンティティを失わないように支援することで、自己肯定感を高める学習に前向きに取り組む姿勢が期待できる。 6 特別入学者の認定と進学後の包括的な支援を ・高校進学の壁が格差や差別の温床ともなり、社会的不安定化にもつながりかねない。高校入試の際の特別な配慮や、特別入学者の設定、高校進学後の包括的な支援などを全国に広げ、自治体の格差を縮める必要がある。 7 外国学校やその他の当事者による教育活動への支援を ・国と自治体は、外国学校が行う日本語教育や日本で生活に必要な教養を身につけるための教育への支援を、外国学校に通う子どもの健康と安全を守る施策も。 ・外国籍の子どもへの不就学をなくするためには、外国学校を「義務教育相当の普通教育を行う教育機関」として位置付けることが必要。海外にネットワークをもつ子どもたちには、日本語と母語・継承語双方の学びが大切。社会統合と経済的自立にもつながる。外国学校の役割を認知して支援を。 ・外国学校がホームページと becoming、いじめによる不登校・不就学を減らしている面もある。子どもへの心理サポートも重要。外国学校の経験・知見を外国籍児童生徒の支援活動に活用するべき。 ・学校以外でも、共通のネットワークを持つ人たちが自発的な努力によって行う母語を中心とした教育活動への支援を。
8 全国の自治体にタスクフォース・連絡協議会を ・全国の自治体で、セクターを越えて力を合わせるためのタスクフォースや連絡協議会の設置を。 9 海外の日本につながる子どもたちへの支援を ・海外に移住した日本人（外国人と結婚した人も含む）の子どもたちへの母語教育・継承語教育への支援を「継承語としての日本語教育」は、「言語教育」とも「外国語としての日本語教育」とも異なる。家庭で使われる言語を基盤として、高いリテラシーの獲得をめざす継承日本語学校（継続されるべきである）。 ・海外での補習校への日本政府からの支援は、国籍や帰国・永住予定の有無による優待を要せず、定住家庭や国際結婚家庭の子どもも継承語コースや国際学校も支援の対象に。日本からの教員派遣の際は、現地の多言語環境の子どもたちの状況について十分な就任前研修を。 ・政府支援の補習校がない地域でも草の根的継承日本語学校を認知し、教師養成や教室確保、カリキュラム編成、教材作成などを国として支援する。海外在住者の経験・知見を日本在住の海外にネットワークをもつ子どもへの支援に活用するべき。 10 施策の成果の継続評価と定期的な見直しを ・以上の提言を「日本語教育の推進に関する国の基本方針」に反映させるとともに、それらの提言がいくらか具体的な施策として実行に移され、どのような成果をあげているのかを定期的に評価し、定期的に見直ししていく仕組みを構築する。	
各分科会代表 分科会A「小さな子ども」 宮崎幸江（上智大学短期大学部教授） 鈴木美子（国際基督教大学教育研究部研究員） 分科会B「学校」 高橋謙雄（認定NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ事務局長） ビッチャード理論（YSJ グローバル・スクール多文化コーディネーター） 川原翼（御幸市立済小中学校教諭） 分科会C「外国学校」 小沢大輔（東海大学教授） 兼安（外国人学校ネットワークかながわ共同代表） 分科会D「海外」 中島和子（トロント大学名誉教授） サルデーニャ（母語継承語バイリンガル教育学会海外継承日本語部代表） 関係者 「和とりの子どもたち」プロジェクト 電話：0463-58-1211（東海大学教養学部国際学系 小沢大輔） Email: info@cfbnsj.org（R・サルデーニャ・ソウ・インターナショナル） 関連資料のダウンロードは以下のホームページより バイリンガル・マルチリンガル（BML）子どもネット https://sites.google.com/view/bmlc/home	



モンチアズール40周年記念祭

なぜモンチアズールにしていると
こんなに楽しいんだろう？

安藤まつさ

水を得た魚の如く

私が初めてモンチアズールに着いたのは約二十年前。偶然たどり着いた当初、一か月だった滞在予定期間は三ヶ月、半年となり、もう最後にはここを離れないと決めた。それほど私を夢中にさせた場所。その頃日本では、ちょうどバブル崩壊とともに日本社会が物だけでなく、人も使い捨てをする時代が始まっていた。外国放浪帰りの私も東京の片隅で物の如く扱われ、そんな社会から逃避した先にたどり着いたのが、このファヴェーラ「モンチアズール」だった。

今回モンチアズール四十周年祭に参加するに当

たって、二十年前と同じ疑問が頭の中を巡っていた。「ここにしていると楽しい、その楽しさはどこから来るのだろう？」

モンチアズールの活動域は確実に広がっており、若い世代が生き生きと育っているのを感じる。地域の保健所の名前は全部「モンチアズール保健所」になっており、黄熱病の予防注射を打ちに行ったらモンチアズールTシャツを着ていただけで、「あなたは職員ね。無料でどうぞ」と言われた（知り合いの日本人は断られた）。この保健所業務を含む職員は千五百人に膨れ上がっていた。

四十周年祭の前イベントは「社会イニシアティブ」世界フォーラム。この会の中で毎日終わりに

全体集会があり、そこでは久しぶりに来た私が、前に出て話す機会が何度もあった。

ここにいると自分の意見を表現することに躊躇を感じない。他人や周りを意識することなく伸び伸びと誰もが意見を述べる事が出来る。水を得た魚の如く「自分」を表現できた。

フォーラムの最後はランタンウォークだった。フォーラム会場となったサンパウロ市郊外オリゾンチアズール地域には掘立小屋のファヴェーラが新規に広がっていた。まるでアフリカの原野の生活とサンパウロという東京のようなモダンな都会が隣り合わせに存在するようだった。暗い小屋の中からたくさんの小さな好奇の目がこち

生まれてきた使命

この記念祭の一つのクライマックスにモンチアズール劇団の「モンチアズールのアズール（青の意味は何の青？」という演劇が行われた。

その演劇の中で中心的役者にエジソンという最近定年退職をしたが今でも同じ職場でボランティアとして働く職員がいた。

私がここに着いた当初の彼はリンダウヴァのキッチンで働くお酒の問題を抱えたおじさんだった。彼は小学生の息子を一人で育てている時期だった。口数は少ないがよく笑うおじさんで、

ある時ウテさんが「フォリア・ジ・ヘイス」というキリスト降誕のお祭りの演劇詩集を出した。彼はそのお祭りの主要人物であったので彼にサインをもらいに行くと、本を手にしていつものように口数少なくじーっと本を見つめていた。隣で見ていたボランティアが小声で「もしかして字が読めないんじゃない？」と囁いた。

ブラジルでは彼の世代はたくさんの方盲者がいる。その瞬間彼がニコツと顔を上げ「ウテは詩を間違えて書いているよ」と一言。彼はたくさん詩を空で朗読することができる稀有な人だった。

この四十周年祭の演劇でもものすごいたくさんのセリフをこなしていた。彼もブラジル北東部出身で貧困を逃れて職を求めて都会に着いた人だ。

今回の住民たちの過去の話でもたくさんそのような話が出た。

職を探すため都会に家族で来た主婦がモンチアズール劇団に入り演劇公演で生まれて初めて乗った飛行機、初めての外国旅行珍道中。掃除婦としてモンチアズールで働き始め、幼稚園の先生、キッチンとあらゆる職場を担当し最後は以前、掃除婦をしていた診療所で保健師になったおばちゃん……。このような話は枚挙にいとまがな



水を得た魚のごとく話すことができる



住民たちの泣き笑い人生談



エジソンの役者姿

い。なぜ、そんなことがモンチアズールでは普通に起きるのか？

そのことを考えて一つ思いついたことがあった。それはルドルフ・シュタイナーが第一次世界大戦末期に戦争終結に向けて提唱した「社会三分節化運動」という社会論である。

社会を一つの有機体と捉え「精神生活の自由」「法の下での平等」「経済生活の友愛」という三つの構造に分け、お互いが干渉しないという社会論。シュタイナー学校はその運動の中で生まれた。昨年シュタイナー学校は百周年、この社会論も同じく百周年。ウテさんにこのことについて話を聞く機会があった。



リンダウヴァのキッチンにて日本人・ドイツ人ボランティア

食堂のおじちゃんが詩人で俳優であることと彼が経済的に苦しい立場であることに、モンチアズールでは何の矛盾もない。しかし一般社会では、アジア人放浪青年がトラックの運転をしながらラジオで英語放送や哲学の授業を聞くことは大変矛盾があつて、同僚運転手から「お前英語でさんの？アホか？」と真面目に言われる。トラックの運転手が英語できて何の意味があるのか、という至極冷静な経済的序列社会に沿った意見であつたりもする。

まっさ モンチアズール創設当時からこの思想をモンチアズールに組み込もうと思つていたのか？

ウテ 社会論は知っていたけれど、最初はただ、一人一人の魂が生まれてきた理由、一人一人の魂がこの地上に生まれてきた使命をしっかりと全うできる方法をいつも考えていただけ。途中から社会三分節化運動を少し強く意識はするようになったけど。

ウテさんは貧困生活を支えるために単純労働をする若者の姿を見て、「彼らの生まれてきた使命はどうなるのか？」と講演や著述でよく訴える。

ルドルフ・シュタイナーは社会が幸福になるためにこの社会論を生み出し、ウテさんはコミュニティにたどり着いた人々の魂の発展を考えて日々の活動を展開した。ともに人間の幸福を考えてたどり着いた社会論であり、行動であつた。

ウテさんの話を聞いた中で辿り着いた結論は、「人間の幸せを考える両者の思いは結局同じ結論に至つたのではないか」であつた。果たして現在の資本主義社会の究極の目的に人類の幸せがあるのだろうか？物は溢れるようになったけれど、逆に物のなかった時代を懐かしむ声を年老いた世代から聞くのは決して稀ではない。

モンチアズールには色々な人がたどりつく——貧困を逃れて都会に出てきた字の読めないおば

あるべき社会の姿

ではモンチアズールと一般社会は何が違うのか？ウテさんがモンチアズールの活動で当初から一番考えたことは一人一人が魂の使命に気が付けるようにすることだつた。

それはルドルフ・シュタイナーの社会論の「精神の自由」に当たるのだろう。それぞれの精神が経済によつて脅かされたり、法律や政治によつて差別されることのない社会を目的としたのはそこにあるのだろう。

そのことをウテさんはコミュニティの中で行動してきたから、経済的困窮地域において人々は経済的抑圧に大きく影響を受けることなく精神の自由を発達させることができたのではないか。

モンチアズールで生まれた若い世代には経済的困窮生活にもかかわらず、早くから外国へ行く夢を抱き、お金を持たずして世界に羽ばたき、三つ



モンチアズール創始者3人
左からパウロ・ウテ・ヘナーチ

ちゃん、男手一つで子育てをするアルコール依存症の食堂のおじちゃん、企業社会に馴染めないアジアの放浪旅行者……そして多くの人がここで人生を再発見し、自分の個性にアイデンティティーを取り戻す。

貧困から逃れるために都会に来たおばちゃんも、食堂のおじさんをしているエジソンも、放浪アジア青年も、その社会的、経済的地位と精神的存在は何の関係もない。経済的優劣は多くの場合その人の個人の努力よりもどの環境で生まれたのかに大きく左右される。だから経済生活には友愛が必要なんだと私は思う。



40周年祭お祭りリハーサル

も四つも違う言語を操る青年が何人もいる。ブラジルの社会常識から考えたらとてもない話だ。

貧困者に対し「貧困者の仕事」という見えない一般通念がある。トラックの運転手が英語を話すことを変だと思うのと同じ全く根拠のない既成概念だ。モンチアズールで育つとそんなものの存在すら気づかず「世界へ羽ばたく夢」を持ちながら成長する。

今回、住民の話を聞いていてモンチアズールとは、個々の精神の自由を経済困窮なんかに囚われずに生きることが可能な場所なのだと気付いた。それが魂の喜びとして人々を幸せにしているのではないか。だって貧困は今もそこにある。

今エジソンはすっかりアルコール依存も克服し、貧困者だつた彼が定年後モンチアズールでボランティアとして働き舞台役者をする。彼は本来あるべき社会の姿を示してくれていると思う。

トラック運転手のアジア青年はモンチアズールにたどり着き、地域の若者に英語と日本語を教え、CRIの仲間と一緒に漁村に文化センターを建て、現在は四つの言語を話してスイスの難民キャンプで難民たちと歌を歌っている。歌う能力があるとは自分でも気付いていなかった。

あの時モンチアズールに一生住もうと思つたアジア青年に私の直観は間違っていなかったのだ。全ての社会がモンチアズールのようになること、それがここからもらった私の夢である！

七年ぶりのブラジル　　モンチアズール

渡辺恵美

二〇〇五～〇六年に、モンチアズールで一年間ボランティアをしていた渡辺恵美さんが、今回、五泊九日という弾丸旅行でモンチアズールを訪問しました。ボランティア後の人生においてもモンチアズールとの心のつながりを感じさせてくれる旅行記です。



ドイツ人ボランティア、ヴィオラと再会を喜び

いつになってもブラジルへのサウダージ（ポルトガル語で「郷愁、思慕、切なさ」などの意）は一向になくならず、ここ数年は強くなるばかりで行きたい気持ちが増え出ている。その気持ちは時に涙となって流れ出ることもあった。

そんな時、モンチアズール四十周年のお祝いのイベントのを知り、全日程の参加は難しいので、最終日に参加できるよう八月八日の夜ブラジルへ出発した!! 七年ぶりのブラジルに心が躍る。滞在日程は六日間と限られているが楽しみが溢れる。ドーハからブラジルまでは長すぎて心が折れかけたが、長い長いフライトを終えブラジルに到着する。グアルーリョス空港に降り立つと感覚でわかるブラジルに嬉しくなりながら、入国手続きの列に並ぶ。いざ!! リンダウヴァの家へと向かうも金曜日の帰宅ラッシュと重なってしまい渋滞に巻き込まれなかなか進まない。それでもモルンビの駅あたりに来ると見覚えのある景色にわくわくが止まらなかった。

無事、リンダウヴァの家に到着するとバイ（リンダウヴァの旦那さん）が外のドアを開け、「Oi, Emi. (やあ、えみ!)」と呼んでくれた瞬間にブラジルへ

来たことを強く実感した。

到着して早々バイがオレンジを持って来てくれる。久しぶりにバイと話をしていると、上の部屋から東海大学の学生さんたちを呼んで来てくれた。リビングで学生さんと話をしていると、神戸さんの名前が上がる。神戸さんが劇を見に来ているという情報を得て、私はすぐ文化センターへと向かっていた。

十四年前の記憶を辿り、文化センターを目指すも、途中の分かれ道で迷ってしまう。偶然向かいから歩いてくる人にどこかと尋ねると、「そこ!」と指をさして教えてくれた。劇場のホールでは入り口まで人が溢れていた。劇の雰囲気を感じて、劇が終わると帰る人々の中にリンダウヴァとジュニーニョを見かけ、声をかける。リンダウヴァはいつものように私をあたたく受け入れてくれた。会場に入り急いでまずマサさんを探す。それから神戸さんの場所を教えてください、挨拶をすると神戸さんはとても驚いた様子だったがすぐに優しい笑顔で話しかけてくれた。ブラジルに着いて早々のサプライズに私自身も驚き、また幸先の良いスタートに明日以降のブラジル滞

在に期待も大きくなる。

マサさんや日本人ボランティアの人たちとリンダウヴァの家へ帰ると、おいしいピザが出来上がっていた。台所には日本人が集まり、みんなでリンダウヴァの手作りピザを頬張る。ピザのおいしさと食べている人の笑顔は何年経っても変わらないということを改めて実感し、ふと十四年前のメンバーでの同じシーンが私の頭の中に映し出された。明日はいよいよモンチアズールの四十周年を祝うイベント!! 明日の時間を確認し、ブラジル一日目が終わる。

二日目の朝、今日は土曜日ということで、懐かしいフェイラ（路面市場）の日だった。前回はリュス（リンダウヴァの三男）とリンダウヴァとフェイラに行ったのを懐かしく思い出した。道の両サイドには野菜や果物が沢山並べられたお店がぎっしりと並ぶ。サトウキビジュースのお店も変わらずあり、なんだか嬉しくなった。パステル（中にひき肉やチーズが入った揚げパイ）屋さんに寄り、出来たてのパステルを堪能した私は大満足! フェイラの最後はバナナのエリア! 両サイドにバナナのみ置かれているお店が並ぶ。そこを通りながらマサさんに「ブラジルのバナナはなぜ食べたくないのか? この味を日本でも食べれたらいいのに……」と話をするとマサさんも私と同じことをスリスで考えていたこと思わず笑ってしまった。文化センターに着き、焼きそばの準備をみんな

です。キャベツや白菜、ピーマンやパプリカを大量に切る。会場にはとても華やかな飾り付けがされており、いつものComunidade（*1）とはまた異なった雰囲気になってきた。お互い笑顔で「Oi, Tudo bem? (やあー元気?)」と言いながらハグをする。それだけで充分だった。また、少しすると今度はずっと会いたかったチア・イベッチ（*2）がやって来た。チアに声をかけ顔を見るなりふたりでハグをして泣いていた。こんなにも早くチア・イベッチと再会できるとは思っていなかった。なので本当に嬉しすぎた。チア・イベッチはいつも私のことを思っていてくれたというのを聞いて本当に嬉しかった。私もずっとずっとチア・イベッチにサウダージだったので念願のチア・イベッチとの再会が実現しサウダージだった私の



チア（保母さん）・イベッチと涙の再会

心が満たされていた。みんなが集まり家の中へ入り、楽器の演奏に合わせて歌の練習とタイミングの確認をしていく。ふと、周りを見渡し、歌を聴いているところの場所にいることへの喜びがあふれ出し、「あー、私はここに居ていいんだ!」と幸せを全体で感じとる。

イベントが始まり早々にキコとヴィオラと再会する。キコは私がここに居ることに驚いた様子だった。ヴィオラの優しく包み込む変わらない笑顔に懐かしさを感じながらハグをする。ヴィオラと一緒にいた十四年前のベルサリオ（赤ちゃんクラス）での楽しい思い出が一気に蘇ってきた。

四十周年のイベントの様子を少し高い場所から眺める。Comunidadeは老若男女問わず大勢の人で溢れており、とても賑やかで祝福ムードに包まれていた。今回の四十周年のイベントは若い世代の人たちが中心となり、準備や装飾・運営をしており、その人たち一人ひとりが当日のイベントを楽しみながら担当していたように感じた。

イベントが終わると、リンダウヴァとマサさんと三人で家に帰る途中、二人が並んで歩く後ろ姿をまたこうして見られることに幸せを感じ、思わずカメラのシャッターを押した。空が夕焼けから夜空へと変化する途中のグラデーションが本当に美しく感動し、私自身が持っている本来の感情がじわじわと蘇ってくるのを実感する。生活のふと

したことにこんなにも感動し、愛おしく感じることに嬉しくなる。

リンダウヴァの家に戻り、マサさんの最終荷造りを手伝う。マサさんはリンダウヴァの作ったおいしいフェイジョンを食べ、スイスへと戻っていった。どこからきた自信かはわからないが「マサさんとはまたすぐに会える！」と思いつながら、タクシーに乗るマサさんへ手を振っていた。

週明けの四日目と五日目の二日間はリンダウヴァと一緒に文化センターの調理場へ行った。大量の鶏肉や瓜、野菜を切り、大きな袋に入ってきた何種類もの野菜をそれぞれ種類に分け、更に状態の良いものと良くないものに分けた。大きな鍋等も午後から沢山洗った。リンダウヴァと一緒に仕事をしている人たちもとても優しく、ジェスチャーやゆっくり話して野菜の切り方等を私に教えてくれた。野菜や鶏肉と向き合う時間は自分自身とも向き合う時間でもり、日々慌ただしく生活している中でこんなにも自分自身と向き合う時間がなかったのだとても貴重だった。

五日目の夜はリンダウヴァのリクエストでカレーを（ポランティアの）ひとみさんと一緒に作った。少しサラサラしたスープカレーのようだった。いろいろな旨味が凝縮されていておいしいカレーが出来上がった。パイの喜んでくれた笑顔がとても印象的だった。久しぶりにこうしてまたリンダウヴァと一緒に夕食を作れたことが嬉し



Rosana と centro cultura
(文化センター) にて

かった。夜、二階のバルコニーで菌を磨きながら風の冷たさと街灯の明かりに映し出される細かい雨を見て、ブラジルの季節が今、冬であることを初めて実感した。

最終日はひとみさんと一緒に保育園へ行った。チア・イベッチと再会し、クラスの中へ。子どもたちは初めての私に興味深々。子どもたちの間に座り、朝の食事に加わる。子どもたちから質問を受ける。質問は「チアの名前は？」と「お母さんの名前は？」の二つだった。聞きなれないお母さんの名前に目を丸くし、頭の上に「？」が浮かぶ子どもたちの表情がとてもかわいく、思わず笑ってしまった。子どもたちは歯磨きを終え、室内で自由遊びを始める。

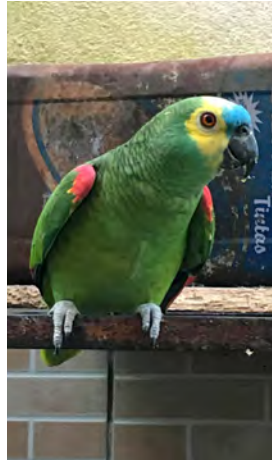
初対面の私にも子どもたちは他のチアと同じように接してくれた。「ドレスを着させて！」「お人形をどうぞ！」「靴ひもを結んで！」「あの子がたたいた!!」等たくさん関わってくれた。ある女の子は長方形の木のブロックを持ち私の所へ来



20 歳になったヴィートルと一緒に！

リンダウヴァの家に戻り、帰国するための準備を急ぐ。リンダウヴァが待ち合わせのジョバンニグロンキの駅まで一緒に行ってくれることになった。改札出口付近でリンダウヴァといういな話をしていると……カンピーナスへ行っていた東海大学の学生さんたちと再会しバナナのお菓子をもらう。帰る間際にまた会えることができて良かった。最後に私はリンダウヴァに感謝の気持ちとまたブラジルに来ることを約束し、ハグをしてリンダウヴァと別れメトロに乗り込んだ。

七年前の滞在ではクリスマス休暇中であつた為、会いたかった人たちに会えなかったことが心残りでした。今回はモンチアズールの四十周年を祝うイベントということで、念願の再会と新たな出会いがあり、本当に充実した六日間の滞在となった。



大好きなローロ
(リンダウヴァの家番するオウム)

ヴァの孫が二十歳になりとても背が高くなって驚いた。少し見上げなければ私はヴィートルと話が出来なかったが、十四年前から変わらない笑顔と優しさが嬉しかった。十四年前のクリスマス休暇中はよくヴィートル、ジジ（リンダウヴァの次女）と遊んでいたのを思い出し、毎回ブラジルを訪れる度に成長したヴィートルに会えることが本当に感慨深い。次回は何歳になったヴィートルにあえるのだろうか……それがまた楽しみでもある。

ルシアーナ（リンダウヴァの三女）も結婚し一児のお母さんになっていた。ルシアーナの笑顔は少女の笑顔から母の笑顔へと変わっていた。ジジとは十四年ぶりの再会となったが、十四年間のプランクを全く感じない程に自然と話をしていた。

ジジも結婚し一児のお母さんとなり、ペイーニャの学童でチアとして活躍しているのを知り、刺激を受けた。

オウムのローロと黒猫のペレにも再会でき本当に六日間癒されていた。十四年前と比べあまりしゃべらなくなったローロだったが、見つめ合う

て、「チアの頭が爆発しているから綺麗にしてあげる！」と言って持っていた木のブロックをくしに見立て私のクルクル髪を一生懸命直してくれた。しかし、私の髪はパーマなので全くなおらない。それでも一生懸命頑張っている女の子にキュンキュンしてしまった。

少しすると、五、六人の子どもたちがエプロンを付け、チアと一緒に水彩を楽しむ。水彩をとても待ち遠しい女の子はわくわくしながら、私に水彩のことを教えてくれた。水彩と自由遊びが終わったところで、一度ダイアナのクラスを訪問する。ダイアナのクラスは一階の二歳児クラスで子どもたちはちょうど椅子に座っているところだった。みんなとても不思議そうに私をじっと見ている様子がなんともかわいかった。ダイアナとお互いの近況報告や懐かしいベルサリオでの話をする。十四年前、同じベルサリオでポランティアをしていた私たちが、時を経てブラジルと日本で同じ保育の仕事をしているということが嬉しかった。チア・イベッチのクラスの子どもたちは、十四年前私が初めて研修に入ったチア・ソランジェとチア・ジアニのクラスと同じくらいの子どもたちだった。その当時の私は子どもたちの話が聞き取れず苦労したのを覚えている。今回は子どもたちの話がわかり、その会話に参加できたことが本当に嬉しく、心から楽しんだ。念願の新園舎の訪問が出来、七年越しに夢が叶った。

とお辞儀してくれる姿を見て、また大きな声で「エミー！」と呼んでくれるのでは……と少し期待をしてしまった。

滞在中は毎日リンダウヴァのおいしい料理を食べることが出来、本当に幸せで、私のサウダージのひとつがリンダウヴァのおいしい料理であったことに気づく。リンダウヴァの家は七年前から更に進化しており、本当にリンダウヴァとパイのパワーには圧倒されてしまう。また次回訪れた時にどのように進化しているのか楽しみで仕方がない。ブラジルに帰れる場所（リンダウヴァの家）大切な人たちがいるから、私はブラジルに帰るのだと今回の旅で改めてわかり、毎回私を優しく迎えてくれるリンダウヴァとパイ・私とリンダウヴァをつないでくれるハファ（リンダウヴァの四男）に感謝の気持ちでいっぱいである。

*** 1 comunidade** コミューニダデ、共同体の意。最近ではファヴェーラと言わず、コミニダージと言ったのが好まれている

*** 2 チア** おばさんの意。モンチアズールでは先生のことを親しみを込めてチアと呼ぶ。

ボランティア体験記

丹羽 広大

僕は七月三十日から八月二十四日までの約一ヶ月間ブラジルに滞在しました。その一ヶ月の間には沢山の人々との出会いや見たこともない風景や文化、そして日本にいたら考えもしなかったであろう社会問題など様々な刺激を受けることが出来ました。

そしてこのたった一ヶ月でブラジルの、そしてモンチアズールの虜になってしまいました。僕の心を掴んだのは人々の深い温かさです。

特に「挨拶」は最高でした。日本の挨拶は相手と一定の距離を保ち頭を下げ、お互いを感じあうというものです。確かにこの挨拶も好きなのですがそこから相手と仲良くなるまでには時間がかかります。

しかし！ブラジルの人々は初対面であろうがなんであるが、お互いにゼロ距離まで近づき肌で触れて相手を感じ、相手がどんな体格なのかど

んな目の色をしているのか、どんな匂いなのかまで挨拶で分かっています。その挨拶が僕は大好きでした。そうすることで相手とすぐに打ち解けることができるし相手のことをすぐに理解することができるようになりました。

モンチアズールやオリゾンチアズールに滞在して感じていたことは、日本からこんなにも離れているのに修学旅行で行ったイタリアやスウェーデンのような異国感がないことです。顔立ちも言葉も環境もまるで違うのにどこか近いものを感じました。

それが何なのか明確ではないのですが、ひよつとしたら心の温かさというか気遣いが日本人と似ているのかもしれない。もっと言葉が喋れたらどんなに楽しいだろうかとよく思いました。

ぼくはブラジルで「日本にいたら決して見ることが出来なかったもの」を見ることが出来ました。特に「貧富の差」をあらにはっきり目の当たりにしたことが今までなかったのだから衝撃的なことでした。

貧しい人々が多くいるということは知っていたのですが、いざ現地に行ってみると自分の頭では想像しきれなかったことがそこには沢山ありました。強く印象に残っているのがペーニャから見た景色です。

手前には赤レンガの家が隙間なく並ぶファベラが広がっているのですが、少し視線を奥にすると立派なオフィスビルや高級住宅街、高層マンションが建ち並んでいました。あらなにも平然と「貧」と「富」が隣合っているとは想像もしなかったので驚きましたし、同時に悲しさや情けなさなど言葉には表せない感情や違和感を覚えました。



丹羽 広大

小学6年生まで愛知シュタイナー学園に通う。中部は設立が間に合わなかったため地元の公立中学校に通い、中学3年生の2学期から北海道シュタイナー学園いずみの学校へ転校。去年の3月に卒業。ただいまギャップイヤーを満喫中の丹羽広大です。



そして「何とかしなきゃ」という強い思いが込み上げてきたのです。

そんな状況を変えることができるのは「教育」だとぼくは思っています。人はどのような教育を受けてきたか、どのような体験をしてきたかによって行動も考え方も大きく変わってくると思っています。幼い頃に受けた教育や体験は立派な根となり、成長する幹と枝を支える土台となるものです。それをしっかりと育める環境を作ることが社会や経済を良い方向に転換する最善な方法の一つだと思います。

このような貴重な経験をこの歳で出来たということに意義があるとぼくは思っています。モンチアズールで感じたことを大切に、これから幅広く柔らかな視野をもって世界に羽ばたいていきます。そしてまた機会があれば必ずモンチアズールに帰りたいと思います。

河村 響

今にも雨を降らせたそんな夕刻の空模様でした。手に手に作ったランタン（*1）を提げた人々の列は、オリゾンチアズールをあとにし、外へと歩を進めていきます。暗い、木々に囲まれた小道を進むと、静かに、小さな火で暖をとっている人影がありました。その時はまだ、その先に何があるのかわかりませんでした。

ただ列が先へ動き始めると、少しずつ、その様子が見えてきました。家々が立ち並んでいます。しかしそれは家といえるものなのか。そのタテモノの粗末なつくりは、凝視することさえためらわれるほどでした。手に入ったものをどうにか組み合わせたような家々。

確かにそれは、ファヴェーラと聞いて何となくイメージしていた風景だったかもしれせん。しかし、実際に目の当たりにすると、衝撃でした。暖をとることも、光を得ることも大変な暮らしなのでしょう。そんな集落の中を、ランタンを持った集団が通り抜けていきます。住んでいる人々はみな窓や扉のところにでてきて、通りゆく集団を見つめていました。彼らはそのような集団を見てどのような心境だったのだろうか……？

「かつてファヴェーラであったモンチアズール。今でこそ安定した生活が築かれているけれ

うどその空模様のようにどんよりと陰った気持ちの中で、その男の子にあげたランタンの灯が彼の希望の灯となりますように……と。

本当に貧しい生活を実際に自分の目で見、知れたということは、今回僕がモンチアズールとその周辺を訪れたことで得られたもののうち、一番大きなことの一つであり、また衝撃的なことでもありました。そして、ただその貧困の中にあることだけでなく、少し離れば、いやすぐ近くにでも、彼らとは対照的な、豊かな暮らしをしている多くの人々がいるということ、財政的に、権力的に強い人たちがいるということを隣り合わせて比較し、体験できたことが、さらにその差を明確にさせたのだと思います。

もちろん、そういった状況が世界にはあり、ブラジルではそれが顕著に、小さな範囲の中で見られるということは情報としては知っていましたけれども、目の前にその景色があったとき、直接そういった話を聞いたときは、とてもそのままで放っておけないことだと、強く感じさせられました。

自分たちの生活で精一杯の彼ら。それに対し、遠いほかの国からやってきて、いろいろなことをみて、しって、かんじられる僕たち。少しでも、より余裕のある人が、ない人に手を差し伸べることで、格差を埋める、最も有用な、大切な行動な

ど、昔の生活はやはりもっと苦しいものだった。でも、いまはここまで来ることはできている。その可能性を、彼らにも示してあげることの意味があるのだよ。」

ランタンを片手に、その路地を歩いていると、今まで感じたことのないような感覚に陥りました。むかむかするというか、不安になるというか、逃げたくなるような感じというか……。

「二十一世紀だよ!! 今。それなのにこんな取り残されるような人々がいていいの?? こんな信じられる?」

彼らには安定した生活はなく、人権すらまともに与えられていません。

その小道も出ようというころ、一人の男の子が僕のところへ近づいてきて言いました。

「それもらっていい?」

ほかに、ランタンを彼らに渡している人はいました。でもいざ自分のところに来ると、何かが直接、そして一層強く伝わってくるのです。彼の目に、ランタンはどのように映っていたのでしょうか。すぐに消えてしまうようならその灯でさえも、とくべつなものだったのかもしれない。キラキラした一生懸命な目。

ふいに僕は涙が出そうになっていました。ちょ

うでしょう。モンチアズールの人々が、周辺の貧しい人々に示している行動がそうですし、またそこモンチアズールに他の地域から来るボラントニアの活動もその一つに当たるでしょう。

フォーラム（*2）中、出会った人々と話している中で、「でも、日本にもこういう貧困の地域はあるでしょ?」といわれることが多くありました。ブラジルにいたところやって目の前でその格差がわかる一方、日本ではそのようなことが隠れてしまい、普段目にすることはめったにありません。ただし同じようなことだって実際は起きています。そのようなことにも気づかされ、日本国内において生活しているときでも、意識してそう言ったことに目を向けなければ、と思わされる経験でもありました。

***1 ランタンウォーク** 自作のランタンを手し、職員、子ども、コミュニティ住民などがともに近隣を練り歩き、出会った人々にろうそくが灯ったランタンを手渡していく、オリゾンチアズールで毎年行われる行事。

***2 社会イニシアティブ・世界フォーラム** 二〇一九年八月二十日にモンチアズールで行われた。

河村 響

小学1年生から千葉県あしたの国シュタイナー学園、5年生途中から北海道シュタイナー学園いずみの学校へ通い、2019年卒業。今は世界各地をまわりながら、自分の中に新たな世界を見つけています。

ファヴェーラの中をランタンウォーク



掘っ立て小屋の通りを遠くから



ファヴェーラの掘立小屋と犬



村の広場で暖を取る住民たちと



河村響（一番右）リンダウヴァの食堂で



板垣ひとみ

はじめまして。板垣といいます。モンチアズールに来て二カ月が経ちました。日本では児童養護施設（親と暮らせない子どもが暮らしているところ）で働いていました。モンチアズールでは、午前中はクレッシェ（保育園）、午後は学童で働いています。

ブラジルに来て、子どもはどこでも変わらないなあと思っています。やりたいことがまんできなくてつい体が動いてしまう、感情がわかりやすかったり、大人を信用したいと思っている。日本でもブラジルでも子どもたちはかわいいです。

今勉強させてもらっているのは、子どもへの接し方。クレッシェでは三、四歳の子たちが教室の中で走りまわっていますが、先生たちはできる限り子どもたちが自由に遊べるようにします。子どもたちは遊びの中で学んでいくので、子どもたちの体験を大人が止めないようにしているんです。

イスを積み上げてその上に乗ったり、それに登って大人よりも高い塔を作り上げたりするんです。「落ちたらどうするの」「崩れて人に当たったらどうするの」って私だったら怒るところです。椅子を積み上げるのを禁止するルールも作ります。

けれどこの先生たちは、そのときの状況を見ながら本当に危ないときにしか止めません。最近

は毎日イスが積みあがっていますが、それでもイスを積み上げたらダメとは言わないんです。子どもたちは自分の力をめいっぱい試しているところだから。

あれやっちゃダメ、これやっちゃダメが（私からすると）とっても少ないので、子どもたちのいろんな表情や遊び方が見られます。

すぐ人に手を出しちゃう男の子が大事そうに人形が寝ている乳母車を押していたり、いつも走り回ってる子がクッションと柔らかい布につつまれて部屋のすみで寝転んでいた。イスの塔は、この前その子たちができるであろう一番の高さに到達しました。



挑戦しているとき、できあがったときの顔は見ているこちらがうれしくなるような顔でした。子どもたちってこんなふうに学んで、成長するんだとモンチアズールに来て見ることができています。前の仕事では四年間、朝から晩まで子どもたちといっしょにいたのに、ここで新たな発見があるのはおもしろさ半分、反省半分です。

帰国するまで一ヶ月を切り、今はまとめの時期だと思っています。モンチアズールで日々新しいことを勉強しながら、今までの自分を見返す作業をよくしています。地球の裏側まで来ても自分からは逃げられないということを体験したのも大きな経験の一つです（笑）。子どもたち、ここで働く大人たちと一緒に最後までじっくり過ごしていきたいと思います。

佐藤愛

初めまして。約二ヶ月間のボランティアをしております。佐藤愛です。ブラジルに着いて一週間をオリゾンチアズールで過ごし、その後はモンチアズールでボランティア活動をしています。

活動内容は、午前はペイーニャと言うモンチアズールからは少し離れた別のファヴェーラで、週の三日はキッチン、二日は十一歳から十三歳のクラスのお手伝いをしています。午後はクレッシェと言う託児所で二歳の子どもたちのお世話をしています。午前午後に分かれて、こんなにも年齢の差がある子どもたちと過ごすことは、自分の仕事環境のメリハリになって面白いですし、現地で育つ幼児と十代のそれぞれの問題にも触れることができます。



こちらでは二歳児に限らず四、五歳児のような子どもでも、おしゃぶりを口に入れたまま歩く様子をよく見かけます。子どもが過度に騒がないよう、両親が家庭で与え続けていたり、本人の精神安定剤にもなっているようです。

ただ、そのために歯の並び方が通常よりも丸まっており、発達していないそうです。クラスにいるそのような子ども達は、発語が少なかったり発音も悪く、食事中に嘔む事が得意ではないように感じます。

十一歳から十三歳にもなると発育も進み、ファヴェーラの社会で生きる子の中には、アルコールやドラッグをしている子もいるそうです。

実際に私がお手伝いをしている十代クラスにも、すごく絵のセンスがイイ!!と思う男の子が、これらを家庭の中で摂取しているそうです。日本でもし絵のセンスがある子がいたら、その子が美大に行く未来を想像しますが、親や周りの大人たちがドラッグをしている様な家庭環境の中で、私が彼の未来を想像するのは、今の周囲の大人たちと同じようにファヴェーラで過ごす姿です。

——人間は、「子ども時代」のほんの数年間を改善することができたら、貧困の苦難もお



これは小貫大輔さんがメールで書かれていた一文です。
週末に広大なジャングルみたいな山の中をトレッキングしたり、夜までサンバを踊ったり、ブラジルの自然や文化を楽しみつつも、ボランティアワークの中では、接する子どもたちの背景にあるだろう環境を、見て感じる事がメインのような感じですよ。あと一ヶ月もないですが、自分が何を与えられるかと言うよりも、感じたことを周りの人達に確認して、せめて自分の視点からはどう見えたのか、疑問も含め全てを伝えていけたらと思っています。

モンチアズール母娘珍道中 後半

阿部すみれ

二〇一八年二月よりブラジル、モンチアズールで一年間ポランティアとして滞在した阿部すみれさん。なんと五歳の娘、渚ちゃんと一緒に渡伯という、異例の母子滞在でした。高校生の頃にホンジュラスに留学経験のあるすみれさんは、スペイン語ができたためポルトガル語の上達は早かったようです。とは言え、幼子連れでの滞在は苦勞の連続。大勢の協力もあって、なんとか波瀾万丈の一年間を無事、終えることができました。二人は二〇一九年二月に帰国。すみれさんは休職していた児童養護施設に復帰し、渚ちゃんは四月から小学校に入学しました。

中身の濃い、充実した一年間を素敵な文章で綴ってくれています。今号では後半部を掲載させてもらいます。どうぞお読みください。（編集部）



前半では到着から慣れてくるまでの日々、モンチアズールの仕事や街の情景について書きました。今回は後半の出来事や気付きを書きます。

植物や生きた鳥を育てることを通して、生きている地球の声を聞くこと。そしてお世話するというのはそれに応えるということです。

畑の中の教室へ

冬休みの前の六月頃のことでした。娘も生活に少し慣れてきて、私は学校の会議で「学校が必要としていることはなんですか」と聞きしました。「ドイツ人が帰国してぼっかり空いてしまっていた小学校での英語クラスと、サポートを必要としているクラスがある。」

それまでの数ヶ月の幼稚園や事務室の給食食材の各クラスへの注文・仕分け作業も大切な時間でしたが、勇気を振り絞って、英語クラスとクラスのサポートを始めました。（後に「サポート」というのは自分の学びのサポートであったのだと自覚することになります）

そして通うことになったレジリエンス・スクールという、モンチアズールが運営するシユタイ

ナー学校小学部の一年生の教室は、幼稚園や学童のあるシャカラから五分ほど離れた畑の奥にあります。毎朝バイオダイナミック農園（*1）を通って、背の高いひまわりや、朝露の光る色濃く、力に満ちた野菜に迎えられるながら、一年生の教室に通うことになりました。この農園では給食に使う野菜を育てていて、子どもたちもこの畑の道を通って教室に通います。

畑といえば、私の滞在していたオリジンチアズール（前号参照）には給食用野菜を作る農園とコミュニティガーデンの二つがあります。地域のために開かれた、パーマカルチャーとバイオダイナミック農法の両方を取り入れたコミュニティガーデンでは授業よりも自然を必要としている子ども、地域の障害を持つ人たちの働く場所として、また、みんなの憩いの場としての機能を持っていました。私も時間を縫ってコミュ

ニティガーデンに行きコーヒーをいただくのが至福の時でした。

赤土の色、たくさんの可愛い葉っぱたち、大地の母と父のようにそこにずっしりという大好きな先生の存在。ウルク（*2）の種で顔に赤く模様を描いた子どもたち、朝採ったフェンネルやミントで淹れたハーブティの味、アースオーブンから立ち昇る煙……ファヴェーラの中のオアシスでした。

植物や生きた鳥を育てることを通して、生きている地球の声を聞くこと。そしてお世話するというのはそれに応えるということです。人間が地球で生き働くということや地球に生きる人間の責任（声に耳をすませなければ草木が枯れてしまう）の本質なのではないかと考えました。

このようにして私は三十歳にして幼稚園を卒園し、小学校に入学することとなりました。

*1 バイオダイナミック農法

有機農法。生産物だけでなく生産システムそのものも生命体とする。宇宙の天体の作用を農作物に生かした農法。

*2 ウルク

熱帯のアメリカ大陸原産の果実。実を割ると中に赤い種が入っていて、ブラジル原住民は身体のパイントにその種を使う。種を加工したものはコロラウと呼ばれ、調味料として使われる。

毎日毎晩、自分の器をすっかり空にして、そんなインスピレーションを受け取る日々。終わりと始まり。破壊と再生。そんな言葉がびったりの毎日でした。

未来への信頼

小学校での英語の授業、二十五人のクラスを前に教えるのは生まれて初めてでした。過去に学童での英語クラスや家庭教師は経験がありました。が、シユタイナー学校の英語は全く初めて。とにかく穴の空いた時間割を何らかの形で埋めようとアイデアを絞り出してみることになりました。

そうというのもレジリエンス・スクールの英語教師は募集してもなかなか見つからず（サンパウロの外れに位置するオリジンチアズールまで通勤するのは大変で、なり手が少ない）長年ドイツ人ポランティアたちが試行錯誤してきました。先生たちは、「大丈夫。必ず相応しい人は相応しいタイミングでやってくるから。」と待っていました。

当時、同じく探していた音楽の先生も、オイリュトミーの先生もその言葉通り、相応しいタイミングで素晴らしい先生が現れました。英語の先生もいつか見つかるといいなと思っていたますが、レジリエンス・スクールの第二外国語はスペイン語。もしかしたら、あまり心配してい

なかったのかもしれませんが。

頭でっかちで、怖がりで、せっかちだった私は「歳月の経過のなかで私たちに流れてくるものを、霊的世界からの贈り物」として待つことを知りました。

自由な遊び・子ども時代の追体験

子どもたちの名前を覚えて、各学年の英語の始まりと終わりの祈りを暗記しました。他のシユタイナー学校のカリキュラムを調べて、私の持ち時間は恐る恐る始まりました。娘が寝てから歌やリズム遊び、ゲームを調べたり、覚えたり、祈りのフレーズや新しい歌など暗記することに刺激的な毎日でした。

授業のリズムと構成を考えるのは難しく、学校での授業はやっぱり子どもたちが二十人以上も集まっているので、工夫が必要でした。ポランティアが担当しているために、毎年先生が変わる英語クラスは、初めは収拾がつかず、内



学期末の授業発表会。社会活動実習に来ていたサンパウロ市内のシュタイナー学校の生徒さんたちと。1年間の滞在中に長期休み以外はシャカラ（オリゾンチアズール）で毎月シュタイナー学校の職業体験を受け入れていました。7校ほどのシュタイナー学校の若者たちとの出会いがありました。同じブラジル国内で育っている学生さんたちも経済格差や文化の違いに毎回寝込む子や、途中でリタイアとなる子もいました。最後の体験のシェアはシャカラの毎週木曜日の会議で。友達ができたり、作った歌を歌ったり、笑いあり、涙あり。同じブラジル人でも踏み入れる機会の少ない地域。豊かな体験を共にできてよかったです。

実生活と学校のコントラスト

言葉使いが荒くて、性的に過激な表現をして、見事に大人の模倣をする子どもたち。家ではダメなことをすると、叩かれ、罰を受けるという子どもたちが何人もいました。親の不在、一人ぼっちの子どもたち。すぐに大声で叫び、殴り合いになるような喧嘩をしてしまします。耳が悪いのか、大きな声で話さないと聞いてもらえない環境だからなのか、（多分お国柄ということよりも）叫ぶように大きな声で話す子どもが多かったと思います。自信がなくて、授業でもすぐに「自分にはそんなこと出来っこない」という子どもたち。

親が週末も働き、家では留守番をしながらネットフリックスのグロテスクなホラー映画と戦争ゲームにアダルト映像三昧という子ども。月曜日も火曜日も水曜日も生活リズムがなくてアグレッシブ。一緒に遊んでいると、小さくなった靴に足をぎゅうぎゅう詰めにして履いて、毎日同じ服を着ている子どももいます。壊れた同じビーチサンダルの鼻緒を何回なおしたことでしょいか。寝不足。空腹。爆音。薬物と隣り合わせの毎日、詰まった呼吸。職員会議では先生たちは靴のサイズや洋服のサイズのメモをシェアして、衣服を集めて必要な子どもに渡してい

容も積み重ねにくく頭を抱えました。どのクラスにも座っていない子どもや、走り回る子ども、大声で喋る子どもたちがいて、一コマの授業をまとまったものにしようと、自分の今までの「学校」という概念を分解して自分の中で組み立てる作業が必要でした。「教育」ってなんだろうということを考えることになりました。何のために、何に向かって子どもたちと関わればいいのだろうか。

一番大切にしたいのが、子どもたちとの自由な遊びでした。自分ができることと、子どもたちとつながりたいという思いで休み時間にはいつも子どもたちと走り回っていました。

裸足で鬼ごっこをしても、みんなの方が足が速いので全然捕まらない。裸足の足で走ると、石や松の葉、デコボコ道で私は全然うまく走れない。高い木に登らせたら、クラス一番のやんちゃ君。授業で私を困らせてばかりの子どもに、今度は休み時間になると「勇気出して！ほら、信じて登って！」と励まされていました。

裸足の松ぼっくりサッカーは足が痛くて、全然できなかったし、遊びの中では子どもたちが先生でした。その時間の中では子どもの身体感覚もそれぞれで、それぞれの身体と内側のリズムがある（全然違う）ということに気づきました。土いじりや植物の観察やお世話、遊びを通して子どもたちと発見することは、毎日新しく新鮮でした。

休み時間の風景。一年生。走り疲れて一休み。
大縄や、畑のスプリンクラーで水遊び。



自由遊びの時間には、子どもらしくてキラキラした姿を発見することが日課になりました。目の美しさ、子どもの許す力、愛する力、お世話が好きな子、勇気と正義感が誰よりも強い子ども、探究心旺盛な子ども、素話で話されるお話が大好きな子ども。愛され、個性が尊ばれること。自分の中の美しさや真実を表現できる環境。一見荒くて、早熟な子どもたち。

暮らしている環境がどうであろうと、私たちはそこに人間らしく愛と調和を持って暮らす場所を創り出すことができ、そのためには大人は自己と向き合うことを妥協しないこと。寂しさ、苦しみ、虚しさ、私には抱えることはできないけれど、希望と一緒に生きていくことは出来る。そんな場所を守り、新たな可能性を開いておくことが大人の役割。子どもたちが環境に翻弄されずに、自分を生きる土台を守ること。これから歩む道は、誰も通ってない道を選んで歩んでもいい。見たこともない世界をこれからつくれるのだと信じたい。モンチアズールの挑戦と毎日の営みを見て、そう思う様になりました。レジリエンス・スクールの教員代表であるマリオ先生は「すべてのアイデアは宇宙にある。それを受け取るかどうかなんだよ」毎日毎晩、自分の器をすつかり空にして、そんなインスピレーションを受け取る日々。終わりと始まり。破壊と再生。そんな言葉がびったりの毎日でした。

ました。それでも学校では水で遊び、絵を描いて、裸足で土の上を駆け駆け回り、木に登って、踊って歌います。畑作業。鶏などの動物の世話。先生の語らう素話を、私も隣に座って浅い呼吸のその背中を撫でながら聞きました。あたたかいご飯。お昼寝。お掃除。水彩やフォルメン。学びのたのしさ。両方の世界を生きている子どもたちを目の当たりにしました。

（オリゾンチアズールの幼稚園はまだ新しいので、幼稚園から小学校に上がった子どもは一年生のクラスには数人だけでしたが）幼稚園に通っていた子どもは、帰宅後の生活環境が大変な場所であっても、身体の中には日中のリズムを保つことができる。幼稚園に通うことが、子どもたちにとっての心の栄養となっているのだと身をもって感じました。

毎日、何年も共に過ごす先生や大人たちの存在。忘れていない、ここにあなたがいるということ。愛されること。モンチアズールはあちこちで置き去りにされた子ども時代を安心して生きられる場所、一人一人の意識でそれを可能にしている場所だと思えます。意識が光となって社会を包みこむことが出来るのだと感じました。その熱が場所を満たしているのです。

何より大切なことは、子どもが困っているときに、「誰からも手を差し伸べられない。見放されてしまった。世界は私を諦めた。誰からも愛されていない。」ということではなく、「自分を大切に思ってくれている人がいる。愛されている。」と感じられることではないでしょうか。

世界を信じられる強さが、困難を克服しているレジリエンス。自らのあり方でその存在を全うする揺るぎない強さ。私たちはそれぞれが違って、そしてつながっている。誰か一人だけが特別なのではなく、一人ひとりが特別で唯一無二の存在なのだということ。人間がともに生きることの命のダイナミックスは生き生きとしたものでした。

ウテさんも言っていました。「受け入れられるいうこと。歓迎されるということ。愛されるということ」。“*Ser acolhida, ser recebida, ser amada*” みんな子どもは、光とあたたかさを必要としています。私たち大人は闇を越えて光を見出そうとします。



子どもたちと遊ぶ時間。
ウルフペインティング。
いつも真っ赤に。

「友だちを愛することは簡単なこと。私たちがすべきは、自分から最も遠い人を許し、愛するという事。」

今ここの自分に取り組むこと

私の方は、生活にも慣れてきたとはいえ、娘が突然熱を出したり、朝幼稚園で私から離れられない日もありました。でも安心して預けることができたのは、先生たちへの大きな信頼があったからです。

少し遅れてクラスに到着すると落ち込み気味の私に、「みんな持つてるパワーー〇〇パーセントで働ける時も、七〇パーセントの時もある。二〇パーセントかもしれない。でもそれが人間なんだから。二〇パーセントならそれを出し切れればいい。うまくいかないと嘆くよりも、最善を尽くすことの方がいいじゃない。」と先生が言葉をかけてくれました。教室に二人いる先生同士もそうやって支え



マンゴーの皮を剥く幼稚園の先生。朝ごはんを食べていなくても、学校に来れば朝のフルーツが食べられる。その後午前中に軽食、お昼にはお昼ご飯、午後には午後のフルーツ。保育園はそれに加えて夜ご飯も。学童も食事付きです。事業によって財源が異なるので、行政の補助金の事業である保育園と学童、職業訓練校は給食室で。寄付金による運営である学校と幼稚園は各教室で先生の手作りです。

私たちがすべきは、自分から最も遠

合っている姿や雰囲気から、子どもたちも家庭的なあたたかさを感じていたと思います。

稀にどうしてもうまくいかない先生同士のペアの時はペアを変えてみたり、会議で新しい選択肢が練り出されるプロセスを共にすることが出来ました。人間は完璧じゃないから、共に支えあうのだということを言葉だけじゃなく、生きること。

学校で働く看護師の先生は、荒れている子どもの様子を見に行ったり、お休みの先生がいるクラスに手伝いに行くなど、日本の保健室の先生と違って、いつも走り回っている状態でした。

「先生が足りていればもうすこし子どもたちの健康面のケアに集中できるんだけど……」レジリエンス・スクールの挑戦と毎日の健闘。問題があっても前進する力を目の当たりにしました。（改善していく予定だと言っていました）

教室では先生がケーキを焼いている香り、授業中後ろで手仕事をしていたりする安心感、お鍋から立ち上る湯気。畑から届く野菜。家庭ではそんな体験がない子どもたちにこそ、この家庭的な教室での安心感が、大人たちの信頼が、祈りが、世界を信じられる心のレジリエンスを育てるのだと思います。

家庭や親への働きかけも大切にしていました。モンチアズールで失われた子ども時代を追体験しているように、自分の純粋な気持ちを大切にできる瞬間を無邪気に笑う大人の顔を見ては、懐かしい場所に来たような気持ちになりました。毎日継続して取り組むことは大変です。でも



学校職員会議での誕生日会。
今月のパースデーのお二人。

仲間がいること。時代を越えて変化しながら広がること。四十年前たった一人で始めたウテさんの存在。モンチアズールにいると不思議と私たちを貫く強い愛の力を感じるし、それが自分の変革への勇気となるようでした。

難しい会議のときは

私は、それまでは世界のどこかに愛と調和の素晴らしい世界があるんじゃないかと思っていたかもしれない。学校の会議は素晴らしい形でその期待を裏切ってくれました。

共に働く中で、人間だからちよつとした一言に傷ついたり、傷つけあったり、信じられなくなってしまうたり、本音が言えなかったりする場面もありました。投げかけた言葉が虚しく宙に響くだけの時、会議中に悲しくなって誰かが涙したりするような場面もありました。

クラスの中で起こっていることは、その先生の責任を問うことや、問題を起こしている親の責任を問うことでは変わらない。みんなの子どもたち。みんなの大切なあなた。みんなのまち。みんなの学校。そうやってひとつずつ、一人一人が立ち返って考えていました。

それはまるで、組織、学校全体が命をもって



忘れられたような世界の果てに、愛を忘れなかった人を守られた場所がある。モンチアズールの挑戦。そこは懐かしくて勇気ある仲間に出える場所。人間の尊厳のために苦しみ戦う熱意ある美しい人たちに会える場所。

生きているかの様でした。親や、先生、誰かの背中を後ろ指差して批判することでは何も変わらない。マリオ先生は言いました。「友だちを愛することは簡単なこと。私たちがすべきは、自分から最も遠い人を許し、愛するという事。」

その時話していた、最も遠い人とは、自分が理解できないと思う様な人のこと。この時は、子どもを学校に入れたらそれからは学校に全て



ドイツやオーストリアからのボランティア仲間にもたくさん助けられました。日本から来た未来ちゃんは子育てを共にする、まさに救世主でした。みんなと出会えてよかった！

お任せで、何度電話をしても連絡がつかず、学校に何年も来ていない保護者のことでした。子どもは荒れていて、先生が何度訪ねていっても会えないので、この苦しさを職員がともに乗り越え、お互いの理解を対話で深めようとしていました。

レジリエンス・スクールはコミュニティも家族もみんな一緒に作る学校。多様性の中で人間として生きること、違いを超えて、自分を生きることの中に調和の鍵があるのだと、言葉で言うよりずっと大変なことだと思いますが、今ではそう思えます。違いを認めて、違いを喜び合えたら。そしてともに手をとって、生きていけたら。それには大きな忍耐と時間がかかるということ、謙虚にそれを生きることの背中を見ていました。その中でいつも希望と喜びを見出し、彼らは今日も歩んでいます。

渚が体調を崩した時には「日本で今まで食べてきた、母の味を作ってあげなさい」と母の味の大切さを教えてくれました。

どんな時でも洗濯をしながら、大きな大きな声で賛美歌を歌う彼女の横で一年暮らせたことは、私の人生の宝物です。彼らの家にいると、何か大きなものに守られているような気がするのです。言葉も国も感じさせないほどに、懐かしく、大切な人とたくさん出会った一年でした。どんな時も彼女の瞳の奥には火が灯っています。その瞳を忘れません。この出会いは人生がもたらした、ブラジルでの人との出会いは人生がもたらしてくれた大きな贈り物だと思うのです。彼らはブラジルの家族です。



心で動くことってなんてパワフルなのでしょ。くってまでも生き延びなければならぬ悲しみ。では交錯するファヴェーラの道。

シルバーナさんとの出会い

住んでいた家のシルバーナさん（オリゾンチアズールのボランティアハウスがある家のお母さんで、みんなの母みたいな存在）はいつも娘のことを「私たちの娘のナギサ」と言ってくれていました。大切な子どもをみんなで助け合って育てようね、という彼女の気持ちでした。新しい生活でそれでも育児ノイローゼになりそうだったのでどんなに救われたことか……。

シルバーナさんは昔ミナスジェライス州からサンパウロに出てきて、苦勞をした人。彼女の家は決して裕福ではないけれど、どんな人でも受け入れています。お米とお豆のご飯の夕食、お腹を空かせた誰かがご飯を食べに来てテレビを見ていたり、子どもを預けたお母さんが一緒に一家団欒しています。

シルバーナさんは長年オリゾンチアズールの学童給食室の調理員として働いてきました。モンチアズールコミュニティ協会との出会いで人生が変わったのだと語ってくれました。調理の

泥棒と教会とタクシー

ある晩、夜遅くに家の前の道路でタクシーの強盗事件がありました。強盗犯たちがしつこく運転手を追いかけて、その運転手は戸を叩いて助けを求めました。シルバーナさんはその運転手を家に入れました。強盗たちは彼女の顔を見てもう追いかけてこなかったといいます。

それは二〇一八年、私たちがいたオリゾンチアズールの現実でした。携帯電話は昼夜問わずに盗まれるし、学校や保育園、家のプロパンガスも（プロパンガスは高い）鍵のかかる場所や家の中に入れておかないと盗まれてしまう。冬休み中に教室の窓ガラスが割られ、照明器具や鉄製のものなど金目のあらゆるものが盗まれるようなこともありました。経済格差と不平等は変わらずに拡がり、ドラッグの売買も少なくなるどころか増加傾向にあるという話も聞きました。モンチアズールコミュニティ協会ではドラッグをやめて、オリゾンチアズールの給食室で働くことや、畑の仕事を手伝うような機会の創出もしています。

シルバーナさんの甥っ子は近所に住んでいて、タクシーの運転手をしているのですが、病人や困った人を無料で乗せて運んでくれていました。

仕事をして六人の子どもたちがいる大家族を支えてきましたが、二〇一八年にサンパウロ州が施行した法律に、州の補助金を受けている事業で（直接子どもに関わっていないくても）初等教育を終えていない人は働けないというものがあり、彼女は職を失ってしまいました。

フォーラムなどがあれば、早朝から深夜まで大勢のために食事を作り、最近では家でパンやスープを作って売っています。廃油を使った石鹼作りを広めるなど、お母さんはその腕で常に生活のための糧を創造しています。



シルバーナさんとシルバーナさんのパン

彼の車に乗っている時の安心感。（どんな細い路地裏も襲われるかもとビクビクすることはなく）みんなが挨拶して手を振ったりしていました。心で動くことってなんてパワフルなのでしょう。逆に心を殺して敵をつくってまでも生き延びなければならぬ悲しみ。その二つが入り混じっては交錯するファヴェーラの道。

オリゾンチアズールには数十メートル毎に小さな教会があり、毎日ミサが開かれていて、祈っている人たちがいます。モンチアズールのオーケストラとドイツのドレスデンフィルハーモニーのコンサート（*3）に行った帰りも同じ様な思いになりました。

心温まる両者の交流とハーモニー、モンチアズールの少年のバイオリンのソロにフィルハーモニーの伴奏を聞き帰宅する道すがらたくさん教会の中から叫ぶ様な大きな祈りが聞こえてきます。社会を変革する、心で生きる人間らしい社会の作り方は一人一人の行動に委ねられています。

*3 コンサート

ドイツのドレスデンフィルハーモニーにモンチアズールの元ボランティアがいて、長年両者が実現をあたためてきた合同コンサートでした。モンチアズールからはモンチアズールの音楽学校の子どもたちと若者のオーケストラの参加でした。

先生が用意するケーキなどの軽食とコーヒーや畑で採れたハーブのお茶。ここではどんな人も大切な存在で、先生も子どもも保護者も誰がえらいということではなく、ともに学ぶ存在。

一人一人が尊重される
コミュニティ

1 労働時間と会議

二人の先生の作り出す雰囲気はクラス全体に充満します。学年ごとにどれもクラスによつてユニークで個性的なクラスを訪れるのが大好きでした。体力のいる仕事なので先生たちは、帰宅後の休息や時間内に仕事を終わることを大切にしています。

「働くこと、生きること、全てはつながっているのだから決してどれもバラバラな事じゃないんだよ。」と先生は言います。（深い言葉で今でもたまにこの事を考えています）

そのことを理解した上で時間を決めて共に働くこと。土日の勉強会や行事は有志の参加。七時から十五時の授業で、週二回の放課後会議日以外は帰宅していいことになっています。家庭訪問は時間外になることが多いので、会議を休んで行くこともありました。月に一回はモンチアズールコミュニケーション協会の全体会議（モンチア



ズール、ペイーニャ、オリゾンチアズールの三つが合同）があります。そこには基本的には全員参加でしたが、全員参加を可能にするために月に一回平日金曜日の勤務時間内の開催でした。行政との運営の面と保護者のニーズの面で保育園は全体会議の日も休まずに開けているので、保育園の先生たちは毎月交代で全体会議に参加していました。年に数回はモンチアズールの文化センターではなく、ペイーニャやオリゾンチアズールのシヤカラに場所を変えて全体会議が行われます。

子どもを置いて、ある講演に出かけたいと思った時、「いくつかの講演や話を聞くことよりも、



生の先生みたい) そのままグループ分けのためのクジを引いたり、参加したいワークショップを選び名前を記入します。2 時間ほどの話の後には、毎回違うグループに分かれて、グループディスカッションをしたり、発表に向けてみんなの考えをまとめた芸術的な表現を考えます。朝のカフェ(焼きたてパスタ、フルーツ、ケーキ、飲み物、おかゆ、ビスケットなど)と美味しいお昼ご飯も用意されています。全体会議の日にみんなでご飯を食べながら談話。オリゾンチアズールから行く職員には交通費のバス代も支払われます。(朝 6:30 にモンチアズールに行くためにバスに乗ると、職員だけ)

全体会議の時の様子。全体会議には年間テーマがあり、会議について決める（社会科学部門とでもいうのだろうか）担当職員達が時代と世界の動きを読んで決めています。世界と自分たちに対して立てられる問いは鋭く、世界最先端。2018年は「ブラジルにおける社会三層化運動について」200人以上の職員が参加します。（人文学に馴染みがない人がほとんどですが、誰にでも考えられるようによく噛み砕かれた形で議題が挙げられます。選挙前には政治と選挙などデリケートなテーマも取り上げられました）全体会議に到着すると、文化センターの門でウテさんが一人一人に挨拶。（シュタイナー学校の担



目の前にもっと大切な学びがあることを忘れないでね」と言われたことがあります。

どんなに心に残った言葉でしょうか。家族と目の前のこと（自分も含め）を丁寧大切に扱うことを教えてくれました。

2 さまざまな勉強会 ——開かれた学びの機会

職員が一週間に一時間は、仕事の合間を縫って（自分が出かける間は、もう一人の先生に任せたり、養護や他の先生に助けてもらって良い）毎日どこかで開催されている学びのグループ（羊毛の手仕事、ドイツ語、コース、アレクサンダーテクニーク、手紙を書く会などがあります）に参加する機会が保障されています。

私は「自由の哲学」読書会に参加していました。保護者や地域の人も参加することが出来ます。読書会ではそれぞれが本で読んだこと、自分の人生の中でそれに関わるようなこと、どのように「知識」ではなくそれを生きることができるかなどについて話すのですが、小さなサークルで仲間に、自分の本当のことを素直に話すことができる時間でした。尊敬している人が勉強会で言いました。

「私はまだアントロポゾーフだとは言えないと思うのです。ルールや知識の所有ではなく、本物の精神科学（spiritual science）を理解して生きる



月一の勉強会マイヌンビー

のにはとても時間がかかるからです。知識の所有というのは、他よりも自分の方が優れている、知っていると思うようなことです。」

このような小さな平日の学びのグループの他には月に一度マイヌンビーと呼ばれる土曜日の勉強会があります。運営委員会が年間を通して「バイオグラフィワークと星座」「ブラジル先住民の模様」「ブラジルの郷土料理（州別）」「ブラジル国歌について」などのテーマで企画運営しています。

会議や日常における物事の決定の仕方、小さな勉強会や毎月行われる地域に開かれた勉強会（マイヌンビー）などの学びの機会、年間スケジュールと休日の決め方、意志を大切にして行われる



毎年1月末に行われる「教育者のための集まり」の時に来ていたグアラニ族の子どもたち。つきたてのきな粉餅が大人気！「そんなに食べたらお腹痛くならないかな？」

トで来ていたブラジルの先住民であるグアラニ族の人たちに大人気でした。多くの人が奇妙がる中、グアラニの特に子どもと若者たちがきな粉餅をたくさん食べてくれて、私たちは大喜びでした。日本の伝統文化と、ブラジルの大地に暮らす先住民の人々との文化交流でした。木でできた杵と臼、お餅つきの時の賑やかで楽しそうな雰囲気につられてグアラニ族の人たちが率先して集まって来てくれたことが嬉しかったです。

学校の修復、ランドセル作り、お庭作り、大掃除。事あるごとに保護者と協力して行われるMUTIRÃO（共同作業）。学校は家族や地域に歩み寄って「一緒にやりましょう」と声をかけます。先生が用意するケーキなどの軽食とコーヒーや畑で採れたハーブのお茶。ここではどんな人も大切な存在で、先生も子どもも保護者も誰が偉いということはなく、ともに学ぶ存在。それぞ

行事の準備の仕方、行事の振り返り、子どもの支援会議（子どもの観察）について、キャリアアツプや学びの機会の保障、余った給食をどうするかということや食材管理（長期休み含む）についてなど子どもとの関わり合い以外の運営や制度にまつわることを少し見ることができました。

集まりは他には、毎週木曜のシヤカラ全体会議、毎週の火曜の学校会議と、月に一度のモンチアズールコミュニティ協会全体会議や各行事がありました。集まる機会も多く、それは同じくして顔を合わせ話、手を繋ぎ祈る機会も多いということでした。

3 季節の行事や共同作業 ——コミュニティの尊重と絆の回復

季節行事はブラジルでも春夏秋冬移ろう季節の週末に行われます。六月のフェスタジュニナという南半球の冬至のころに盛大に行われる収穫祭、二月には二泊三日の教育者のためのフォーラム、十一月の働く人の日、他にもイースタークリスマス、ミカエルマス……など。

行事にもありますが、週末の大きな行事は一人ひとりの意志を尊重し、委ねられ、大きな行事はモンチアズールコミュニティ協会の有志の職員で実行委員を作り、行うことがほとんどでした。大切なことを胸に一人ひとりが集って協

れに役割と居場所があるからみんなが集まってきます。みんなの場所を創る時、こうやって先生たち、学校の真心が場所に反映されていくんだなど、じんわりと、でもしっかりと伝わっているという感覚がありました。

共同作業の日以外にも、普段から家族が学校に来てお手伝いをすることは大歓迎です。窓を拭くだけでもいい、給食作りを手伝う、何か自分ができることをして、みんなが喜ぶ。親がいない子は、おじいちゃんや一緒に暮らしてるおばさんが来たりしていました。

学校では先生が偉いわけじゃなくて、みんな大切な役割を果たす、大切な存在なのだという気持ちがある所に生き生きとしていました。そうやって、相手に対して怖い気持ちがなくなつて、絆ができて、少しずつ変わっていく社会。みんなが自信と喜びを取り戻していきます。

マリオ先生のことは「校長先生」とは言わず（シユタイナー学校では共和的な運営のために校長先生は置かないのです）クラスの先生にクラスのことにおける最後の決断を委ねています。毎月のクラス会議（担任の先生と校長先生の話し合い）以外は呼ばれないと行かないことがほとんどだったと記憶しています。困った時、呼ばれた時は行って授業をやったり話を聞いていました。

子ども時代を今生きている子どもたちと遊ぶ時、先生のその「子ども」に対する優しさ、こ



私たちも書道や折り紙のブースを出させてもらったり（日本文化を愛するおなじみキーコ先生に来てもらいました）、九月にもう一人の日本人ボランティアの大谷未来さんが来てからは、在伯約三十年で市内のシユタイナー学校の保護者でもある神戸さん夫妻（奥さんは日系ブラジル人で野菜ソムリエ）の力を借りて、モンチアズール数年ぶりとなる餅つきをシヤカラで開催しました。

半年のうちに二回やった餅つき。行事のゲス

どもへの尊重がじんわりと滲み出る。みんなの子ども時代を第一に守る責任感を基盤に運営されている、民主的な学校（モンチアズールコミュニティ協会）だと思っています。

クリスマスには「秘密の友達」（*4）や時々バスを借りてボランティアと職員がプチ旅行に出かけたり、ブラジルならではの楽しいムードがありました。

*4 秘密の友達 AMIGO SECRET

まず、くじ引きで参加者の名前の書かれた紙を引きます。引いた名前の人に向けて一ヶ月ほど手作りのプレゼント（買っていい）を用意したり、自分の名前は明かさずに手紙を送り続けます。一ヶ月後にはリレー方式で一人ずつ、秘密の友達についてどんな人を説明しながらみんなはその人の名前をあて、秘密の友だち明かしをしていくというものです。



幼稚園のクリスマス会と卒園式と合同で。保護者との毎日のコミュニケーションを大切にしていた大勢の保護者が集まりました。いい雰囲気。子ども達はクリスマスの生誕劇をやりました。



ノーと言われるよりイエスということ。難しすぎるのではなく、出来そうなフォルメンから。木が育ち実がなるように育てることを。自分にも少し優しくなれた気がします。

みんなちがうからこそ、 みんないい

一年生のクラスにダウン症の女の子が、三年生のクラスに自閉症の男の子がいました。障がいを持っているどんな人もその本質（精神存在）において健全で、美しい魂を持っています。彼らは、スペシアルな存在としてクラスに受け入れられ、通ってきています。学校、クラスが（先生も）補い合って共に学ぶことが、豊かな学びだという学校の思いがあって「先生だけが前に立ち教えるのではなく、私たちはともに学び、成長するのだ」と先生が言っていました。私は英語の授業以外では特に一年生のイザベリーというダウン症の女の子がいるクラスのサポートに関わることになり、それは手探りで始まりました。

私の毎日は朝の一時間目のエポック（毎日一二時間目を使って行われる一日の中心の授業、二〜四週間継続して同じ教科に取り組みます）の授業で九歳の一年生イザベリーとの時間から始まります。

身長は小さく、ころんと丸く、いつもいたず

あるんだろう」「彼女の心は何を求めているのだろう、身体は？」「リズムを作ること」「何に困っているんだろう」「彼女にとっての学校は？」と問いだらけでした。

私自身も自分のリミットを越えてしまうことが多かったので、彼女との関係を通して、余裕を持つ、ゆったりするという心の在りかたに取り組むことになりました。彼らを変えるのではなく、自分が気づいて工夫する。彼らに合わせても私も動く。障がいを持つ人たちの世界に私たちが入っていったら、その出会いと融合はどんなに優しくていいものになるだろう、そう思えるようになりました。ノーと言われるよりイエスということ。難しすぎるのではなく、出来そうなフォルメンから。木が育ち実がなるように育てることを。自分にも少し優しくなれた気がします。

娘は家に帰ると今日の私とイザベリーとの様子を聞くのが習慣になりました。私が今日何を学んできたかを聞いて、とても満足そうな顔をしています。彼女たち二人が私の先生であるということは間違いがないようでした。

最後にはイザベリーは自分だけ「スペシアルである」と思われることにはどうやら不満気でした。入りがらなかった教室に入り、私ではなく担任の先生に私もクラスの一員であるとい

らそんな目をしている彼女。シングルマザーのお母さんは昼も夜も遠くまで働きに行っている彼女の家。普段彼女をお世話しているお姉ちゃんは十二歳。イザベリーは夜中にお砂糖を一袋食べてしまったり、誰も止めないと、手当たりしだいに食べてしまうので、朝はお腹を壊したり、体調が悪くてトイレと教室とを二人で往復することがしばしば。他の子どもたちと同じように、寝不足で朝は眠かったり、風邪をひきやすくなかなか治りません。（二〇一九年二月にはイザベリーのお母さんはシャカラの幼稚園で働くことになりました。近くにいられて、時間も子どもたちの学校の時間と同じ時間になって本当によかった！）

最初の頃は教室に入りたくない、後ろの方で遊んだり、外と一緒に植物を見たり、ドングリやお豆を数えたり、土にABCを書いたりしていました。彼女の言葉や表現を理解するのに時間がかかって、遊びはあつというまにエスカレートして、いつも二人でびしょ濡れになったり、手を洗っていたら石鹸を食べてしまったり、泥水を投げられて全身泥だらけ……水彩をやれば私の体は水彩まみれ……。私の限界はどこに

うことをはっきりと認めて欲しい。そう訴えるような行動が増えていきました。「スペシアルなのは私だけじゃない。みんな一人一人がスペシアルなんだよ。同じように大切にされて一緒にいられる事がいい。」そんな声がどこからか聞こえてくるようでした。その言葉は私を通してですが、見えてきたリアルな生きた感覚でした。もつとこのクラスのことを知りたい。個性を理解して伸ばすようなそんな存在でいたいと思うようになりました。

彼女から学んだことは、同じように個としての自分ができること、持っているものからしか与えられない。頭でつかちにならないで「自分だからできる何か」で貢献するだけがいい。そこでは誰もが大切なひとりなのだから。「何をやる」という事の前に、「どうある」というあり方を学んだと思います。自分の中の感覚、思考、言動が一致しているというあり方。

自分の中にあるチグハグさが明るみになり、自分の自己が（自分の内側にも多様性がありますが）一致しているのか、いろいろな角度から感じていたいと思うようになりました。日本での毎日では、見つめられなかった自分のこと。そしてこの仕事は「彼女のサポート」ではなく彼女を受け入れることで変容していく自分自身の学びとサポートだったのかもしれない。本当にありがとう、ベリー。（イザベリー）



自分と自分が合わさって、自分と他者が合わさること。そのことが予感させる命の広がりと深み。内なるものを自由に表現できる喜び。

バイオグラフィワーク

シヤカラの学童は、先生一人に対して子どもが三〇〜四〇人という行政の補助を受けている取り組みです。公立学校に行っている子どもを対象としていて、午前の部と午後の部があります。一日に通ってくる子どもの数だけでも約三〇〇人。それでも不安定な家庭環境や落ち着かない子どもも多く、また職員の働く環境の改善と整備が必要な状況でした。そこで心理士でバイオグラフィワーカーであるアレクサンドラという先生が学童の全体のサポートに来ていました。（モンチアズールの診療所には他にもバイオグラフィワーカーがいます）



バイオグラフィワークで描いた水彩と作った自分の物語

子どもアートセラピーや瞑想、職員むけには心の内を話す対話の時間や個別のバイオグラフィワークを行なっていました。私も彼女と九ヶ月を通して毎週バイオグラフィワークに取り組みました。（ブラジルでのバイオグラフィワークの話だけで長い話になってしまうのでここでは割愛します）

「美しいバラは無常な風に吹き散らされたとしても、その存在を全うしたことになる。——無常であるか否かということが問題なのではなく、存在するものの内的な本質がその存在を意味づけていることが問題なのだ。われわれの精神の理想はそれ自身が一つの世界なのであり、それ自体でその存在を全うすることができるようなあり方をしているのだ。だから外なる自然の恵みがあるかないか、ということによって、その存在の意味が否定されたりしない。」

「われわれのつくるものを自然が日々破壊したとしても、いっこうに構いはしない。われわれは新たに創造する喜びをもつことができるであろう。」R. シュタイナー

失っても怖れることはない。克服できる。突破していくことの勇気をください。強くそう思う日々を過ごしていました。

モンチアズールの呼吸

一人ひとりの行動と想いが出会って新しい希望を織り成す場所。私が体験したモンチアズールでした。自分と自分が合わさって、自分と他者が合わさること。そのことが予感させる命の広がりと深み。内なるものを自由に表現できる喜び。小学校、幼稚園、会議、診療所、学童、保育園、助産院、作業所……

灯されたらうそくの光の中で世界は広く、広がっていました。貧困と暴力、不平等の中でも、灯された胸の光の中では世界が拡がりを持てるということに驚きを感じました。目の前にある現実はいくとも確かに変容しているという感覚。この場所があるということの安心感。日々



助産院カサアンジェラに描かれた壁画。壁画アーティストのアナゴーベルさんによって書かれた絵。命の祝福！シルバーナさんの末娘もカーザアンジェラで産まれました。水中出産もできる。



自己と世界に向き合い、生きる大人たちの背中。ある時、なぜ世界中からボランティアが来たり、見学者が来るのだと思うか聞いてみました。「それは、私たちがすばらしいということではなく、人が必要としているものがここにあるということなんだよ。」
「ステレオタイプのブランドとしてのシュタイナーや、モンチアズールという名前ではなくて。規範やルールということでもなくて。ここが美しいと言えるのは、自由な精神によって、個人の意志によってこの場所が造られているからなんだよ。友情や、何かを新たに造ることに自由と倫理が必要不可欠なようにね」
モンチアズールコミュニティ協会のことに関わっていると、組織が熱を帯びて生きているようで、呼吸しているように感じました。

助け合う2つの畑。コミュニティガーデンに行くと「ベンジャミンさんの畑にいます」（ベンジャミンさん=バイオダイナミック農園の管理人）の置き手紙が。農家を支える仕組みを作り、農業を支えるコミュニティ（CSA-comunidade que sustenta agricultura）はみんな払える額が違うのでスライド式の月額制度で毎月の無農薬野菜セットをお届けし、バイオグラフィワークの畑を運営する仕組み。オリゾンチアズールで作った野菜は15km離れたモンチアズールの職員でCSAに登録している人にも毎月お届け。本当に美味しい野菜とハーブ、フルーツ！



コミュニティガーデン。アースオープンで薪で調理するほかほかご飯。幼稚園のお散歩コースでもあり、小学生も畑のお手伝いをにきたります。カーボンで植物デッサンをしたり、自分たちがタネをまき収穫した野菜でご飯を作れます。（2018年長距離トラック運転手のストライキでプロパンガスも食料も一週間以上お店に届かなくなった時がありました。畑があってよかった!）

詩を書き、歌を歌い、絵を描き、踊ること、自然とつながることを必要としています。子どもたちに遊びが必要なように、人間には共通の魂の栄養のようなものがあると思うのです。

一年を振り返って（二〇一九年）

モンチアズールでの私の一年は、粘土を捏ねて形を作ろうとしては夜になってまたゼロに戻す、それでも捏ねては造形するような重くて立体的な日々でした。出来事や感じたことを言葉にしては破り捨てていました。その時を生きたことにただ没頭したかった。一日を思い切り生きて、深い静寂と夜が訪れて、朝になるとやってくる新しい一日を見上げることが。

私の魂を地中から揺さぶる様な毎日を経て、今元いた場所と同じところに座っています。

実は日本に帰国してからの三ヶ月間は灯された光が消えてしまい、世界がどんどん小さく迫ってくるようで苦しかったです。まるで失われた一年のように、何事もなかったように過ぎる毎日。何が起こっているのかと自問自答を繰り返しました。

二〇一九年三月、帰国したのは、東日本大震災から八年の時でした。日本でも生きるのに精一杯の人たちがいる。……東日本大震災、熊本



の震災後、支え合えるネットワークを持たない人や福祉の網の目から漏れてしまうような社会的に生きにくい立場に置かれた人たちの存在や、子どもの貧困が浮きぼりになっていました。福島では経済的な理由から、移住を選ぶことができなかったり、経済的な理由から元いた場所に帰ることしかできない親子、小児甲状腺癌。お米を買うお金がないシングルマザーや夜の街を彷徨う女子高生の話……

手を差し伸べられるかどうかが運と出会いに依存するような不平等な現実。どんなに正しいこと、真実だとしても、都合の悪いことは国会では変わらないようだと言望し、システムに踊らされる、私。批判が内なる自分に牙を向けていることにハッとしました。

思い出すのは殺伐とした都会のカオスの中で、凛と毅然と存在するモンチアズールです。美しさと尊厳を自分たちで守る。経済的不平等の中、貧しくても人間らしさを守るのだという誇りある戦いに私は絶望ではなく希望を見出します。それは決して甘えでも、贅沢でもないのです。詩を書き、歌を歌い、絵を描き、踊ること、自

分断されていました。昨年のブラジル大統領選の時に友人が「俺たちは右でも左でもなく、前へ進むんだ。」とつぶやいたことが印象的でした。先住民の人々も立ち上がっています。

日本では、れいわ新撰組も横に連帯して「旧体制から新体制へ」という流れです。C R I が取り組んでいるユネスコのネットワークなど、人間が地球上で共通の人類の意志やニーズを通して連帯してともに歩む新しい時代が訪れていると感じます。人間であるということは何かが様々な場所で話されています。シュタイナーの社会運動の一〇〇周年記念もありました。

思い出すのは、レジリエンス・スクールで起こった学級崩壊。二人の先生が出会い、共に働くことによって二つの選択肢から三つ目のものがうまれる」その少年たちは授業の代わりに学校のコミュニティガーデンで地域の人と一緒に畑を耕し、植物を植え、家畜の世話をしたり、収穫物でご飯を作るようになったり、治療的なマッサージを受け始めたりしました。何かを排除することでは、変らない。少年はみるみるうちに変わりました。

他者との出会い。そして、自分の内で分断されてしまった、自分自身との出会い。共に癒し許し変容することによって、大きな希望を感じます。自分自身を真に生きようとする人たちが

然とつながることを必要としています。子どもたちに遊びが必要なように、人間には共通の魂の栄養のようなものがあると思うのです。愛や喜び。希望や創造。それは命とつながる喜び。

震災後多くの人たちが希望を紡ぎながら自分の足で歩き、手を繋いで、復興に向かって歩んでいます。れいわ新撰組の活躍もあります。日本に帰ってくるということは、もう一度ここにある現実と直面し受け入れるということ。自分の中に受け入れて、自分の中でどのように変容させていけるのかを考えています。

手と足と頭とハート、この肉体を使って現実の世界で半径数メートルから小さな変革を起こしたい。念じるだけじゃなく。これから始まる戦いとは自分の成長への戦いです。

分断されていた私たちと再びつながろうとする私たち

震災後の八年間を思い返すとき、皆が混乱の中にいたし、分断されていたと思います。無関心を責めたり、相手を理解できないと言い、互いに互いを引き離して分断してきてしまった様にも思います。

ブラジルでは特に経済格差によって、人々は

と出会い、つながり、共に歩みたい。ちがいを認め、喜びたい。こうやってモンチアズールで受け取った光を持って働いていこう、種を蒔いて育てていこうと思うことで、生きる力を取り戻してきています。

自分たちの手で創造する自由がある。だから、私はこの世界が迫ってくることを傍観してられない。まるでお母さんを模倣する子どものように。私の心の中でモンチアズールは勇氣と愛とを讀えてその光を絶やしません。ウテさんの真理をつく鋭さと、あたたかいハート、そして動き回る足と手。不器用で不完全でも小さなステップを喜びあえたモンチアズールの仲間みんな。「変革は可能だ」の合言葉でこれからも学び、歩んでいきたいと思っています。

最後にこの場を借りて、感謝の気持ちを改めて伝えたいと思います。

当時五歳の娘との一年間のモンチアズール滞在という未知なる試みを受け入れてくれた、モンチアズールのみんな、モンチアズールの愛を日本で実践する大輔さんとC R Iのみんな。そして母の大冒険に付き合ってくれた娘。現地で助け合い暮らしたボランティアのみんな。また日本で待っていてくれた家族と心の家族である職場のみんなに心からの感謝を。素晴らしい機会に恵まれたことに深く感謝しています。

最後にシュタイナーの 言葉を二つ

一つ目は毎回の会議で唱えていたミカエルの祈りです。

どんな時代の暗闇の中でも、自分を抱きしめられる。支えてくれる存在がいることを信じる。こと。そう思うことができました。言葉で声に出すことの力。職員会議で大きな輪になり手を繋ぎ唱えた時のその振動と響きは胸に響くパワフルなものでした。

二つ目は帰国してから、クリスマスのアドベントガーデンの前に読んだシュタイナーの言葉です。

“ *Temos que erradicar da alma todo medo e terror do que o futuro possa trazer ao homem.*

Temos que adquirir serenidade em todos os sentimentos e sensações a respeito do futuro.

Temos que olhar para frente com absoluta equanimidade para com tudo que possa vir.

E temos que pensar somente que tudo o que vier nos será dado por uma direção mundial plena de sabedoria.

Isto é parte do que temos de aprender nesta era, a saber: viver em pura confiança. Sem qualquer segurança na existência; confiança na ajuda sempre presente do mundo espiritual.

Em verdade, nada terá valor se a coragem nos faltar.

Disciplinemos nossa vontade e busquemos o despertar interior todas as manhãs e todas as noites.”

Rudolf Steiner
(Bremen 27.11.1910)

「私たちは未来が人にもたらす恐れのあるすべての恐怖を魂から根絶しなければなりません。私たちは未来についてのすべての感情と感覚の中で平静を獲得しなければなりません。

私たちは来るもの全てに絶対的に公平な目で前を見ていなければなりません。

そして、来たるものはすべて、叡智に満ちた世界の方向性によって与えられると考えるだけです。

これは、私たちがこの時代に学ばなければならないことの一部、すなわち純粋な自信で生きることです。物質界にどんな安全も存在しなくとも、精神世界の常に存在する助けを信じて生きることです。本当は、私たちに勇気が欠けているなら、何も価値がないのです。毎朝、毎晩、意志を鍛え、内なる目覚めを求めましょう。」

シュタイナー
(ブレーメン 1910.11.27)

訳：阿部 すみれ

「良き人間としての安住の地を得たい、そして全ての人間を愛する思想を伝えたい。そう望むことが今大切なではありません。社会の家庭の中に生きて、悪しき人類と共に悪しきその一員となることができるように、自分の才能を発揮することができる。そのことが大切なのです。悪しき存在であることがいいことだからではなく、克服されるべき社会秩序が私達一人一人、そのような生き方をしているから。そのことが大切なのです。自分はどんなに善良な存在であるとか、そんな幻想を抱いて生きようとしたり、指をしゃぶって綺麗にして、他の人間などより、ずっと自分の方が清らかである。そう考えたりするのではなく。社会秩序のなかであって、幻想に耽らず、醒めていることが今の必要なのです。なぜなら幻想にふけることが少なければ少ないほど社会有機体の健全化のために働くことができるでしょうし、今日の人々を深くとらえて離さない睡眠状態から目覚めることもできるでしょうから。それは今日公認されている科学に内在する弱くて投げやりな麻痺状態に巻き込まれず、よりエネルギーでより迫力のある霊学の思想を身につけることが大きな助けになってくれるはずです。」

シュタイナー『社会の未来』高橋巖訳

追悼 アラウージョさん 小貫大輔

二〇一九年九月三日、アラウージョ (José Araújo Lima Filho) さんが亡くなりました。毎年のように来日して、ブラジルのHIV感染者たちの熱い思いを伝えてくれていた人でした。

〈写真は、彼の一九九八年ごろのものです。安価なコンドームを、必要としている人たちの手元に届けようというソーシャル・マーケティングのプロジェクトで、セアラ州の田舎に開いた販売拠点を訪問しているところですね。

アラウージョさんが初めて日本を訪れたのは、一九九四年の横浜国際エイズ会議の際でした。サンパウロのHIV感染者の団体GIV(命をげますグループ)のメンバーで、自らHIVに感染していることを公表して、精力的に啓もう活動をしていた人でした。私たちのグループ(CRI)がブラジルにエイズの孤児院を開こうとしていた当時、開設予定地のコミュニティで彼に講演をしていただいたことがきっかけで、現地スタッフの定森徹さんと意気投合し来日が決まったのでした。

全国をまわった講演ツアーでは、その最初の年からすべての会場で熱狂的な歓迎を受けました。なにしろ力強く、しかもくすぐったいほどの人懐っこさで私た

ちの魂に飛び込んでくるアラウージョさんでした。

「ぼくたちは毎日一生懸命生きているんだよ。だっていつまで生きられるかわからないんだから。でも、命の長さなんて、誰にもわからないことは同じだよね」アラウージョさんはそう語りかけました。彼が、人類を代表して「一生懸命生きている」ように思えたものでした。そんな思いで生きている彼や、たくさんHIV感染者のことを、差別とか偏見とか、社会のくだらないことが邪魔するなんて絶対許せない。この弱虫で頭の固い社会を、力をあわせて変えてやろうじゃないか……、腹の底からそんな思いが湧いてくるのを感じたものでした。

私は、まだ三十代の前半で、「自分だけが生きる、たった一度だけの人生を、毎日一生懸命生きなきゃいけない」んだと、アラウージョさんたちHIV感染者との出会いを通して叩き込まれました。私が人生で受けとった、最大のプレゼントだったかもしれません。

あれから二十五年、まさに彼だけの人生を生き切ったアラウージョさんでした。彼は、自分の人生を生き切ることで、友人たちを巻き込み、社会を巻き込み、ブラジルの国を巻き込み、世界を巻き込んでいきました。一九九六年にHIVの治療薬が開発されると、

HIV感染者たちの運動が広く共感を生んでいたからでした。

この政策を継続させるために、ブラジルの政府は製薬会社の特許をも侵害する姿勢を打ち出していきました。その姿勢はアメリカ政府の抵抗に遇いますが、二〇〇一年、ついにWTO(世界貿易機関)閣僚会議が「世界中の人々の、必要な薬を入手し正当な治療を受けて生存する権利は、特許権に優先されるべき」だと宣言しました。ドーハ宣言といえます。それを潮目に、世界中の途上国でHIVの治療薬が無料ないし安価で手に入るようになっていきました。そのころになるとアラウージョさんは海外にも出かけていって活動するようになりました。その国のHIV感染者たちを応援して、治療薬への権利を獲得する運動に世界中で火をつけるためでした。ブラジルでは様々な政府委員会の委員や民間組織の役員を歴任し、歴史の表舞台に引っ張り出されていきます。足元のサンパウロでも、NGOの代表として貧困地域の若者たちのためのセクシュアリティの教育に力を尽くしました。

生きることが大好きな人でした。エイズをはねのけて生きてきた彼が、今、安らかに眠っています。いや、本当に眠っているのかな。私は、彼がすでに世界のどこかで、新しい命として生まれてこようとしているような気がしてなりません。新しい人生でも、彼はまた思いつきり高い要求を世界につきつけていくのだと思います。力強く。くすぐったくなるほど愛らしい、その魂で。



左がアラウージョさん

CRI - チルドレンズ・リソース・インターナショナル (英語名: CRI - Children's Resources International) について

CRI は、ブラジルと日本の両国で生きる子どもたちの「子ども時代」を守り、支援することを目的とするグループです。CRIという名前には、「子どもたちのための国際資源」という意味があります。参加するメンバーが、それぞれに自分の持つ能力、知識、情報、時間、資金などを「資源」として提供しようという会です。1988年の創設以来、主にブラジル、サンパウロ郊外のファヴェーラ(スラム街)でシュタイナー教育・医療・農業をベースに活動するモンチアズール・コミュニティ協会を応援してきました。現在は、この協会でボランティアとして働いたことのあるメンバーたちが中心となって会を運営しています。日本でも、モンチアズールでえた経験をいかして、ブラジルなど海外にルーツのある子どもたちの支援に力を入れています。

CRI 会員の募集

CRI では、活動を支援して下さる会員を募集しています。それぞれが可能なリソース(資源)を持ち寄るという考えから、一定の会費を定めていません。ご参考までには、多くの会員の皆様に年に3,000円～5,000円を振り込んでいただいています。継続した活動を可能にするために、毎月2,000円(年間24,000円)、5,000円(年間60,000円)と決めて振り込んでくださる方もいます。CRIの会員となっていた方には、活動の最新情報を載せた「くりあんさブラジル通信」を年に2回お送りさせていただきます。

会費納入方法

■ 郵便振替

口座番号 **00200 - 9 - 62458**

加入者名 **C.R.I**

*郵便振替で送金いただく場合は通信欄に「CRI会費」などとメッセージをご記入ください。

■ 銀行振込【ゆうちょ銀行からゆうちょ銀行へ】

記号 **10120**

口座番号 **61790761**

口座名 **C.R.I (シーアールアイ)**

■ 銀行振込【他行からゆうちょ銀行へ】

振込先 **ゆうちょ銀行 018 (ゼロイチハチ) 店**

口座番号 **6179076**

口座名 **C.R.I (シーアールアイ)**

*銀行振込で送金いただく場合は、事務局から返信できるようにメール、ファックス、郵便などの方法で連絡先(住所など)をお教えください。「くりあんさブラジル通信」をお送りさせていただきます。

連絡先

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1
東海大学国際学科気付 小貫大輔研究室

FAX: **0463 - 50 - 2407**

e-mail: **criinfo@cribrasil.org**

HP: **www.cribrasil.org**

Facebook: **www.facebook.com/cri.monteazul**

CRI 主催・共催のイベント(2019年)

1月7日

第2回「彩りどりのほだの」勉強会

3月20日

UNESCO ユースセミナーのお誘い
ワークショップ(東京横浜ドイツ学園)

3月31日

CRI年次総会

7月6～21日

ブラジル日本青少年交流プロジェクト
(カンピーナス日系団体受入れ)

7月20, 21日

UNESCO ユースセミナー

7月26日

「彩りどりのほだの」
教員向けワークショップ

8月25日

「彩りどりのほだの」小島祥美さん講演会

12月12～15日

*社会イニシアティブ。世界フォーラム in エジプト

12月21日

「彩とりどりの子どもたち」
日本語教育推進法に関する国際フォーラム in かながわ

今後の予定(2020年)

2月2日(日) 12:30-16:30

ルドルフ・シュタイナーのアソシエーションと国際連合
～国連のSDGs(持続可能な開発目標)への提言～
東海大学代々木キャンパス
2号館 2B11 教室
東京都渋谷区富ヶ谷 2-28-4
参加費 無料(要申込)

2月18日

「彩とりどりの子どもたち」
秦野市教育委員会とのワークショップ

3月29日

CRI 年次総会

運営委員会(2019年度)

代表 **川原 翼**

運営委員 **青山 蓉香 / 安藤 将 /
稲谷 千妃呂 / 大嶋 敦志 /
小貫 大輔 / 坂井 春菜 /
西原 里依 / 橋口 博幸**

事務局

代表 **星 久美子**